

目 次

特集・プログラミング通論 .....	編集部	1
プログラミング通論の歴史 .....		2
FORTRAN と PASCAL .....		3
アンケートの結果報告 .....		4
プログラミング初級講座（理系の学生が見た文系の学生の様子） .....		4
担当教官（磯道教官）へのインタビュー .....		7
他大学のコンピュータ教育 .....		8
総括 .....		9
新任紹介（その1）新畑茂充教官、秋葉節夫教官 .....		11
昭和63年度総合科学部一年次生沼田研修に関する報告 .....	編集部	12
新任紹介（その2）安仁屋宗正教官、小林ひろ江教官 .....		14
新任紹介（その3）王延平教官、高島敏郎教官 .....		15
「所得の平等と製品市場」 .....	磯道 義典	16
新任紹介（その4）安野正明教官、石樽清司教官 .....		17
街の総科「学生クルマ事情」 .....	編集部	18
新任紹介（その5）田原光広教官、堤誉志雄教官 .....		19
「隣の芝生」 ～通則第19条の活用実態～ .....	編集部	20
「私と野球」－衣笠氏の講演－ .....	編集部	22
新任紹介（その6）罔府寺司教官 .....		24
シリーズ数字 .....	編集部	25
新任紹介（その7）クロード、レヴィ・アルヴァレス教官、中達啓示教官 .....		26
「二年目の社会科学研究科」 .....	編集部	27
飛翔箱		
Fashion But Passion .....	小林かくみ	30
自然農園を訪問して .....	井上 尚子	30
上を向いて歩こう .....	M.2 男子	32
「ダ・スヴィダーニャ！ 淵上克司先生」 .....	米重 文樹	33
学部の記録 .....	編集部	34
34号のお詫びと追記 .....	編集部	37
編集後記 .....		38

## 特集・プログラミング通論

総合科学部の学生も2年次になり各コースに分かれると、自分のコース内必修の専門科目が多くなり、時間割を見ただけでどのコースに所属しているかがわかる。その時間割の中で、どのコースの時間割にも存在する「全コース共通の専門科目」であり、いかにも総合科学部らしい「プログラミング通論」は、特別な存在としてその一角を占めている。特に文系の学生の時間割では、およそ文系には関わりの薄いと思われるこの科目「プロ通」は異様な存在である。それ故に、「プロ通」に対しての学生のとらえ方は様々である。

昭和49年、総合科学部創設の際の目標の1つには、現代社会に必要な広い視野と実用的能力を身につけるために、「外国語教育とコンピュータ教育の充実」というような目標があった。つまり、前号の飛翔(No.34)の特集記事であった「総合科目」が、総科の一般教育科目の“看板”のような存在とするならば、「プロ通」は総科の専門教育科目の“看板”のような存在であるといえよう。

しかし、「総合科目」には明確な運営組織があるのに対し、「プロ通」にはそのようなものはなく、実際は授業担当の教官方に運営は任されているといってよい。それでも今年度は昨年度迄の「プロ通はFORTRAN、一言語」から「プロ通はFORTRAN・PASCALの二言語」に改変された。そして数理の一部の教官方は、端末増加を要望している。

現在の情報化社会では、文系・理系の如何を問わず、コンピュータに接触しなければならない事態は、多くの人にあるであろう。実際、働きざかりのオジサン達は、一生懸命コンピュータの扱い方を勉強している。子供達の中には、高度なプログラムをも作成する子供もいる。このような情報化社会の狭間の中で、私達学生は、コンピュータを扱う必然性を少なからずも感じているはずである。

しかし、学生側から最も多く聞かれる意見は、文系の学生にとってプロ通は非常に大きな負担になっている、ということである。コンピュータに興味があるといえども、実際コンピュータを扱ってみると……、というのが現状であると言えよう。

総合科学部の“看板”といえるはずの「プロ通」が、実は文系の学生にとっては“御荷物”というのが現状であるといえる。

「せっかくコンピュータに触れる機会があるのだから、もっとわかり易く、おもしろい授業を受けたい。」

「せっかくコンピュータに触れる機会があるのだから、もっとコンピュータを使えるようになって欲しい。」

学生側、教官側、それぞれ言いたいことは山ほどあるだろう。それを今回の特集で浮きぼりにして、「プロ通」が本当の総科の“看板”といえるためにはどうすればよいのかを考えていきたい。

## プログラミング通論の歴史

昭和49年の総合科学部創設より、総科の学生はプログラミング通論、いわゆるプロ通を必修として学んでいる。プロ通は昭和49年から現在まで2度の変化が起きている。その理由と開設当時の授業の様子についてふれてみよう。

開設当時、プロ通は一般教育科目プログラミング通論Ⅰとして1・2セメに講義が行われていた。また同時に演習も開講されていた。ところが、一般教育科目として講義が行われていたため、一般学生（特に工・理学部生）の受講者が殺到し、505教室に学生が入りきらないという事態が起った。その状態を改善するため、2年後、昭和51年より専門科目とし、3セメに講義を行い、総科学生以外の締め出しをした。

2度目の変化は、今年、昭和62年度入学生よりコース改変に伴って、講義名もプログラミング通論となり、また、使用言語もFORTRAN 1言語から、理科系の学生がFORTRAN、文科系の学生がPASCALというように2言語になった。

次に開設当時についてふれてみよう。プロ通の講義が開設された当時、プログラミングの授業は珍しく、工・理学部生の受講希望者が多く、授業に支障が生じたことは先程もふれた。また、コンピュータの数も現在なみにあるはずもなく、総合情報処理センターのものを借りて実習を行っていた。使用言語はFORTRANであったが、現在では言語が増え選択の幅が広がったが、当時使える言語がFORTRANとCOBOLしかなかったことと、教官が不足していたため、FORTRAN 1言語しか教えられなかったようだ。BASICはあったが、大学の授業で使うにはもの足りないので使わなかった。

また、コンピュータの数は少なかったが、実習はよくやっていたようだ。どうせ作るのだったら、役に立つものを、という具合に、カレンダーなどを作っていたようだ。コンピュータが世界とつながっているということを見せるために、アメリカのコンピュータとつないで、学生に見せたりもしていたようだ。

最後にプロ通が必修として選ばれた理由にふれておこう。総合科学部が創設されたとき、いったい総科で、何を学ぶかという論議がされた。その結果、

全コース必修として、文科系の分野から現代思想、理科系の分野からプログラミング通論が選ばれた。これから情報化社会に向けて総合科学の名のもとで何を学ぶかと考えたとき、コンピュータぐらいは使え、プログラムぐらいは組めないと、という理由らしい。また、総合科学部の存在理由を問われたとき、外国語と情報処理の二つをあげておけば、十年は大丈夫であろうという考えもあったらしい。文科系の学生からは、昔もよく「こんなことをするために総科に来たわけではない。やりたくない事を、どうしてしなくてはならないのか。」というようなクレームがつけたいらしい。必修であることについて、どうだこうだと言ってみても、教官が必要と思えば、それだけで、十分な理由ではないかということだ。

注) プログラミング通論の歴史については、正法地教官にインタビューした。

(文責 桑原 秀行)

## FORTRAN と PASCAL

62年度入学生よりプロ通に変化がおこった。というのは、今までプロ通の授業は FORTRAN という機械言語のみで行われていたが、新たに文系用に PASCAL という言語が加わったのである。FORTRAN とは、PASCAL とは、いったいどんな言語なのだろうか。

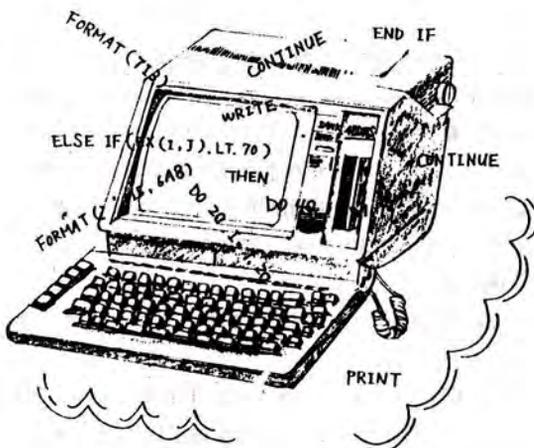
まず FORTRAN は、現在使用されている言語のうちで最も古く、1957年に開発された。ところがまだプログラミングに関する知識や経験がまだ十分でない頃に作られたため、不都合な点が色々ある。例えば、いろいろなコンピュータのために独立に FORTRAN の翻訳プログラム（注）が開発されたため、後になって標準仕様を定めたのであるが、それら複数の翻訳プログラムの仕様に差異があるため、A というコンピュータでは正しい計算をするが、B というコンピュータでは誤った計算をしてしまう、という現象が生じてしまうことがある。また字句の概念が曖昧でこのような奇妙な現象が起きてしまう。たとえば DO 10 I = 1, 100（これは DO 文である）と書く所を間違えて、DO 10 I = 1. 100 とすると、エラーとはならず、コンピュータは DO 10

I への 1. 100 の代入文と判断してしまう。とはいっても、今日まで生き延びているのは、プログラムの蓄積性が優れているからである。大規模なプログラムを作るとき、幾つかの部分に分割し、部分のプログラム（サブルーチンという）を完成させてから、それらを一つのプログラムにする、と言う方法が便利なのだが、FORTRAN はこの方法がやりやすくできている。そして、そのサブルーチンを他のプログラムに流用することが出来る。だから FORTRAN では、膨大な量のサブルーチンが用意されており、これらを使えば大規模なプログラムが楽に開発できるのである。

PASCAL は1971年にスイスのニクラス・ワース博士が開発したもので、明快な言語仕様と効率のよい処理系を持つことを特徴とする言語である。どういう事かと言うと、プログラムに必要な最小限度の知識が他の言語に比べて少なく済み、また、ほとんどのプログラムが、GOTO 文を使わずに、基本文を直列に並べ、そして条件文、ループ文を使うことだけで書くことができるので、読みやすく、理解しやすいプログラムが出来る。そして、翻訳プログラムを作り易くできており、いままで PASCAL を実行することができなかったコンピュータに対して PASCAL を使えるようにする作業が簡単なのである。そのため教育用に向けた言語として普及し高い評価を得てきた。そこで今回、文系向けに、特に数学的知識が必要ない分野に関して PASCAL の授業が実施されたのである。ところが、これらの性質は、プログラムを分割して作ることを難しくしており、大規模なプログラムを作るのに不向きな言語である。

注（FORTRAN などのプログラム言語からコンピュータが実際に実行できる機械語に変換するプログラム。）

（文責 布川 克彦）



アンケートの結果報告

9月のテスト前、現在プロ通を受講している2年生を対象に、プロ通の現状に対する意見調査としてのアンケートを行った。アンケートの集計は、FORTRANとPASCALとに分け、学生に意見を記してもらった部分は、編集部でディスカッションを行い、学生の意見を考えてみた。

〈アンケート集計結果〉 ※数字は人数

FORTRAN

Q. 授業内容・形態について

- i) 難易度 難 ←—————→ 易  
29 20 6 9 4 5
- ii) 教え方 悪 ←—————→ 良  
32 18 15 3 2 0
- iii) 実習形式 悪 ←—————→ 良  
44 10 9 1 0 1

Q. プロ通を自由選択にしたとするなら受講しますか？

Yes. 49 No. 20 (わからない)

PASCAL

Q. 授業内容・形態について

- i) 難易度 難 ←—————→ 易  
37 15 3 2 2 1
- ii) 教え方 悪 ←—————→ 良  
38 7 10 0 1 1
- iii) 実習形式 悪 ←—————→ 良  
30 15 8 1 1 3

Q. プロ通を自由選択にしたとするなら受講しますか？

Yes. 22 No. 36

〈アンケートディスカッション〉

理<sub>1</sub>：アンケートの結果をみてみると、プロ通に満足している学生がほとんどいないことがわかりますね。

文<sub>2</sub>：そうですね、確かに授業を受けていてもそう感じます。

理<sub>1</sub>：それから先生に対する非難の声も多いですけども、これは何が原因だと思いますか？

文<sub>1</sub>：そりゃあ何も知らない学生に、難しいことを言っても、わかるはずないがー。

理<sub>1</sub>：でも教官は初心者のもとも考えて授業を進めているとおっしゃっているけど……。

文<sub>2</sub>：それでも、ほとんどの文系の学生が全くわけがわからんと言ってることは、やっぱり教え方に問題があるということじゃないの？

理<sub>2</sub>：理系の目から見ても、文系の学生は大変そうだったけど、個人的に言わせてもらおうと、なんであんな簡単なことがわかれへんの、と思うで。

文<sub>1</sub>：おみゃあさんがわかるとるだけで、うちらには何もわからんがー。

文<sub>2</sub>：そうそう。

理<sub>1</sub>：そうですね、プロ通は必修なのだから、初心者の学生にもわかる授業をするのが、教官の義務ではないのかと思いますね。

文<sub>2</sub>：そう、例えば授業に一貫性がなくわかりづらいつらとか、教官が勝手にしゃべっているだけ、とかいうのがアンケートでありましたが、このようなことは教官自身で改善していけることじゃない？

文<sub>1</sub>：全然わからん人には、もっと気をくばってくれんと、ずっとわからなくなるだけだし……。

理<sub>2</sub>：それは勉強不足なだけとちゃうん？先生も言

プログラミング初級講座  
(理系の学生が見た文系の学生の様子)

「プロ通」という科目は、文系の学生に言わせると、単位をとるのには並々ならぬ努力が必要なそうである。一応僕は理系なので(?)文系の友達のプログラミングを助ける機会に何度となく恵まれた。この経験を生かして(?)今までコンピュータに縁の無かった学生にとって何処が難しいか検討してみた。(以下の文にでてくるプログラミング言語は、PASCALを使用しています)

プログラムでは当然ながら文系の学生が日常疎遠

な“計算”を度々しなくてはならない。ところが、プログラミングで使われる計算の方法は今まで慣れ親しんだものとは一風趣が異なるところが多々あり、そういう場面にぶつかると混乱を起こしてしまう。

例えば、

「 $\sum k^2$ の計算をするときはこういうふうにするよ。」

for k := 1 to n do y := y + k \* k;

「ちょっと待った、この文ではkは“1, 2, 3, …, N”って変化するんだらう？」

「その通り！」

「だったらこれでいいんじゃないのか？」

うとったろう、最近の学生は全然勉強せえへんて。  
理<sub>1</sub>：つまり、教官にも問題があるけれども、学生にも問題があるということですね。

文<sub>2</sub>：それから、機械に触れるのが少なすぎて、文系にとって今の授業形式では、やりたくてもわからなくなってくるんです。

理<sub>1</sub>：確かに現状では講義中に実習のある時間はほとんどなく、みんな専門の授業が忙しいので、端末室にも行ける時間が少なかったみたいです。

文<sub>1</sub>：だで、コンピュータをいじったことがない人は、ますますわからなくなるんだがー。

理<sub>2</sub>：そりゃ、いい訳やろ。本当にやる気があるんやったら、夏休みにでも集中的にできたんちゃうん？

文<sub>2</sub>：でも、今の状態じゃ実習は少なすぎるんよ。もっと多くして欲しい。

文<sub>1</sub>：それに実習室のコンピュータの数が少なすぎて、開きコマに行ってもいじれんし、あの部屋は狭いし、暑いか寒いのもどっちかだし……。

文<sub>2</sub>：やっぱりプログラミングをやるのだから、コンピュータを目の前にして授業をして欲しい。それから欲を言えば、マンツーマンで教えてほしかった。

理<sub>1</sub>：確かにそうですね。端末の数の問題は教官が直接どうこうすることはできませんけれど、授業の形式をもっと実習重視の方向にもっていくことはできると思いますね。

文<sub>1</sub>：はっきり言って、文系にはプロ通はいらんがー。将来なんの役にも立ちゃあせんし、何で文系がプロ通をせんといかんのか？

理<sub>1</sub>：プロ通をとっておくと、就職に有利だときいたけれど……。

文<sub>2</sub>：本当に有利なんですか？でも、実際利用できる程知識はつかないと思います。就職に有利というのは嬉しいけれど、社会に出て必要なことができるようになる授業じゃないと、文系には意味がないように思います。

文<sub>1</sub>：例えばワープロとか、せめてプログラミングをするのだったら、BASIC ぐらいでいいと思う。

文<sub>2</sub>：そう、自分の身につかないことよりもわかることをやりたい。

理<sub>1</sub>：そうですね、このようなことも教官に考えてもらいたいことですね。

理<sub>2</sub>：結局できる人はできるんやから、やりたい人だけとりゃええんちゃう？

文<sub>1</sub>：そうそう、自由選択にでもして、やりたくない人はとらんでもいいようにしてほしいわ。

理<sub>2</sub>：意欲のある人ばかりやったら、おもしろい授業になるかもしれない。今の授業は、はっきり言っておもしろくない。

理<sub>1</sub>：プロ通を自由選択にすることに関しては、学生も色々意見があると思いますが……。

文<sub>2</sub>：どちらかといえば、せっかく総科にきたのだからプロ通はとりたいと思うけれど、今のままだと無意味ではないですか？

理<sub>1</sub>：そうですね、この事に関しては、FORTRAN を受講している理系の学生も、総科の特色を生かす為に、プロ通は必修の方が良いという意見が多かったですね。それでは、PASCAL の方はおいて、FORTRAN でのアンケート結果で目立つことを見ていきましょう。

文<sub>1</sub>：さすが理系だけあって、内容がわかるという人が多いなあ。でも、先生の教え方や実習形式には不満を持つてる学生が多いなあ。

for k := 1 to n do y := k \* k;

これにはコンピュータをやりはじめて間もない人がよく悩む二つの事が含まれている。まずは反復文と言われるもので、ある条件式が満たされている限り動作命令が何回も繰り返される。やってることは同じなのであるが、こういう記述は数学ではないから戸惑うようである。次に、反復文において特にそうなのであるが、普通数学では未知の値をXやYという変数で表し、変数間に成り立つ関係を方程式として表しそれを解く。ここではXやYの値は未知なだけで、値が計算の途中で変化することはない。一方プログラムにおいてもXやY等の変数を使うが、

プログラム中の変数は実行に従って次々とその値を変えていくのである。コンピュータを使って数字の問題を解くには、変数を序々に変えていき最終的に正しい答が導き出せるようにする。またこの手順の記述がプログラムだとも言える。上記の例に沿って具体的に説明してみよう。ここで使われているのはfor ~ to ~ do という構文で、まずfor以下の文で変数に整数を代入する。そしてdo以下の文を実行する。次に変数に1を増加させてまたdo以下の文を実行する。この“1増加させて実行”を繰り返す。そしてめでたく増加させていた変数の値がto以下の変数の値と同じになったらそれを最後に次の命令

理<sub>2</sub>：そうそう、教官が授業中間違ったり、教科書でも間違ったりする箇所があるけ、それを指摘したら、点数をもらえるゆうて、それに不満を持つ学生が多いで。

理<sub>1</sub>：そうですね、FORTRAN は教科書を読めばわかるということで、どちらかといえば、できる人が物足りないと言ってますね。それより、教官が嫌いだという意見が多く、実習も少なすぎるとい意見も多いですね。アンケートからも見て、どこに問題があると思いますか？

文<sub>2</sub>：私にもわかることなんです、わからない人が聞いたら全くわからない説明をしていることが大きいんじゃないの？でも、これは学声も勉強していないという点を自覚していることが、理系の人と文系の人の違いみたいです。

理<sub>2</sub>：それと前にも言ったけど、間違い指摘制度も大きい原因とちゃうん？

文<sub>2</sub>：それから実習ですが、これは PASCAL も FORTRAN もあまり違いがないですね。実習が少ないとか、端末が少ないとかいうのは……。

文<sub>1</sub>：なんか理系の人で、コンピュータを使ったことがある人は物足りない、と言って、そうでない人はわからない、と言っておって、そういうのも原因なのと違う？

理<sub>1</sub>：そうですね。理系だとコンピュータに触れる機会がある程度ありますので、プロ通の必要性をかなり感じているみたいです。また、理系だと知識のある学生とない学生との差が大きいので、クラス編成も考えた方がいいかもしれません。

文<sub>2</sub>：理系の人、特に数理の人はプロ通に対して肯定的、積極的というのが、文系の学生との大きな違いですね。

文<sub>1</sub>：理系はプロ通がある程度できるし、やらなければならぬと感じているよ。

理<sub>1</sub>：そうですね、理系の学生は、プロ通を割と冷静に受けとめていて、総科の特色としてもプロ通必修であるべきと考える人が多く、文系の学生は、プロ通を単なる御荷物としか考えていないようですね。

文<sub>2</sub>：それから、理系も文系も現在の教官の教え方、実習形式に多くの不満を抱いているということです。

理<sub>1</sub>：それでは今までありがとうございました。後ほどこのアンケート結果を教官に見ていただくので、そのときのコメントを楽しみにしておいて下さい。

(文責 福永 弘樹)

に移る。上の例で  $n=3$  のとき変数の動きをみると、まず  $k$  に 1 が代入される。そうして  $do$  以下の文  $y = y + k * k$  ; が実行されると左辺の  $y$  は 1 (右辺の  $y$  は 0) になっている。そしてつぎに  $k$  を 1 増加させると 2 となりそれで実行させると左辺の  $y$  は、右辺の  $y$  の値 1 と  $k$  の二乗の 4 をたして今度は 5 となる。(  $:=$  という記号はいわゆるイコールで使われているのではなくて “右辺の値を左辺に代入せよ” という命令である。プログラム言語によってはこの区別が明確でないものもある) そしてまた  $k$  を 1 増加させ実行すると、左辺の  $y$  の値は、右辺の  $y$  の値 (これは先ほどの左辺の値) 5 と、3 の二乗 9 を足

して 14 となる。

この辺がプログラミングをやり始めて最初につまづく場所である。ところが、これは初期のプログラマーの人達も悩んだところで、数学が苦手だからつまづいた訳ではない。だから、コンピュータに縁のなかった人が上達するには、“習うより慣れる” で、コンピュータの前に座るのが、上達の早道だといえる。

(文責 布川 克彦)

## 担当教官（磯道教官）へのインタビュー

プログラミング通論をなんのために学ぶか、それは、総合科学部の創設の目的の一つ、「語学と計算機に強い学生をつくる」そのものであると私は思う。これから、学生は情報化社会を生きていく上で、計算機を扱う機会に会うだろう。その時のために、プログラムを組むことで、計算機の能力の限界とすばらしさを実体験しておく方がよいであろう。またプログラムを組むことは、論理的思考トレーニングとして重要だ。

本年度より、言語がパスカルとフォートランの2言語になったが、これは、私がパスカルが好きなのと、フォートランは、数値処理が主であるが、パスカルは、情報処理もできるため、文理を問わず使用ができる。またプログラムが見やすいということもある。フォートランは理科系の一部の学生に、必要であるから残した。

言語を増やして欲しいという意見もあるようだが、ベーシックは文系の学生にはとっつきやすいかもしれない反面、低レベルなことしかできないし、大学の授業でやるのなら、もっと高度なことをやりたい。

一部の学生には、プログラムを組むことより、プログラムを使うということをやりたい、もしくは、ワープロ講座みたいなものの方が、役に立つと言っているようだが、そのようなことは、大学でやるようなことではない。程度的には、小学校でやるようなことだ。

もちろん文科系の学生にプログラミングの勉強が、将来直接役立つなんて思っていない。理科系の学生も入れて、90%の学生は将来必要はないと思う。だからと言って、役に立たないからやらないというのは、おかしいのではないか。高校数学が、一般社会に生きていくうえで必要かという、そうではないだろう。プログラミング通論によって、論理的な作業をするということが大事である。脳を刺激し、頭の体操になるだけで、十分にやる価値はあると思う。

しかし、現状では端末が少ないので、実習が少ないのは事実である。一人一台位あれば、コンピュータを目の前にして、授業が行えるようにすればよいのだが、また学生が使うとき、いちいち予算をとっているが、勉学目的に使用する場合、授業以外にも、在学中は無料で使えるようになって欲しい。

パスカルの講義をやっている、文科系の学生があ

まり理解できていないように思っていたが、これほどできないとは、ショックです。予感はあったのですが、十年ぐらいプログラミング通論をやっている、今年の学生はレベルが落ちているのか、特にできないような感じを受ける。以前の学生は、現在みたいに、家庭にワープロとか、パソコンがあるなどということは珍しく、そういうものに対する基礎知識が少なかったにもかかわらず、できていたようだ。

理科系の学生の英語と同様に、文科系の学生の数学の能力が落ちているようだ。それに学生の態度がイージーすぎるようだ。もう少し復習をやってもらいたい。プログラミングも数学と同様に、基礎から積み上げていかなければ、できるようにならない。最初の部分をおろそかにしておいて、積み上げがないのに、途中からやろうとしても、わからないのが当然であろう。

教科書を読んでもわからない、もっとわかりやすいものはないか、と言っている学生もいるが、教科書は、講義で利用するものであって、教科書が独習に一番よい本というわけではない。講義に出席もせず、教科書を読んだだけで分ろうとしても、難しいのはあたりまえだ。出席率が半分くらいで、分からないと言うのは、学生の身勝手であって、授業に出て、講義をきっちり聞くという、当然のことをしてもらいたい。

またレポートではできているのに、テストができない学生が多い。自分で努力もせずに、レポートができないからといって、人のものを丸写しにして出すなどけしからん。倫理感というものがいいのかと思ってしまう。またプログラミング通論の授業が、自分にとって易しいと思った学生は、「自分の好きなようなプログラムを組んで出せ」と言ったつもりだったが、誰も出さなかった。最近では努力をせずに、結果を求めようとする学生が多すぎる。課題のプログラムでも、きっちりやってきて、立派なものを出されると、うれしくなる。

授業のすすめ方などは、自分なりの努力しかしていないが、いろいろと考えていけば、もう少し分かり易い方法が出てくるかもしれない。今回のことをきっかけに、いろいろプログラミング通論に対して論議していけば、だんだん良くなっていくのではないだろうか。 (文責 桑原 秀行)

### 他大学のコンピュータ教育

広大総科の「プログラミング通論」のように、文系の学生でも、コンピュータの授業が“必修”となっている大学を取り上げた。このような大学の文系の学生が、“必修”であるコンピュータの授業をどのように受けとめているか、また教官がどういう意向で授業をしているか、そのようなことまでは分からないが、そういう大学があるということである。当然ではあるが、理系の、特に工学部系統の学部でのコンピュータの授業は、ほとんど全ての大学で“必修”であることを付しておく。

#### ○大阪府立大学総合科学部

府大総科には、日本文化・西洋文化・人間関係・計量科学・物質科学・生命科学・計測科学の7コースがあり、学生が各コースに分かれるのは、2年次からである。

府大総科では、1年次後期に、専門教育科目の必修科目として、「プログラミング通論Ⅰ」という授業を受講しなければならない。授業内容は、学生便覧に「マイクロコンピュータを使って、BASIC<sup>注1</sup>によるプログラミングの学習をする」と書かれてある。

使用する言語が“BASIC”ということで、大学教授は、将来役に立たない、と言うかもしれないが、学生、特に文系の学生にとっては、分かり易く、また分かればおもしろくなるだろう。実際、府大総科の学生・教官が、この「プログラミング通論Ⅰ」という授業を、どう受けとめているかは分からないが、府大総科では、1年次後期に“必修”としてコンピュータの授業で、BASICを使用しているということである。

#### ○筑波大学（全ての群）

筑波大学では、第一学群（人文学類・社会学類・自然科学類）、第二学群（比較文化学類・人間学類・生物学類・農林学類）、第三学群（社会工学類・情報学類・基礎工学類）、医学専門学群、体育専門学群、芸術専門学群とがあり、各学群・各学類は、入学時に決定されている。

筑波大学では、原則として1年次に、共通科目として、「情報処理概論」と「情報処理演習」を受講しなければならない。学生は、自分の所属する学群・学類によってクラス分けされ、指定のクラスで受講しなければならない。クラス編成は、「情報処理概論」では約100名、「情報処理演習」では、約50名である。授業内容は、開設授業科目一覧によればどのクラスも同じで、「情報処理概論」では「計算機に関する基本的概念と社会における計算機の位置づけを理解させることを目的とする。情報の表現法、計算機の構造・構成、動作原理、能力の限界、高級言語、ソフトウェア、応用例などについて説明する」と書かれており、「情報処理演習」では「TSS<sup>注2</sup>により計算機の使用方法に習熟することを目的とする。演習においてはFORTRANの文法を主として学び、実習においては、端末機の操作、テキストの編集、およびFORTRANの言語を用いてのプログラミングを学ぶ」と書かれてある。

筑波大学では、文系・理系という大ざっぱな区分ではなく、各専攻ごとにクラスが細分化されており、システムとしては学生・教官の要望に充分こたえられるものとなっている。

注1：コンピュータ言語の一つ

注2：端末

（文責 福永 弘樹）

## — 総 括 —

プログラミング通論、必ず総合科学部生は一度は受講しなくてはならない講座である。プロ通に対して様々な意見を述べてきたが、もう一度最初から考え直してみた。

「プロ通が本当の総科の“看板”となるためには」という問題が最初にあった。この問題提起から言えることは、学生は、少なくとも現行のプロ通の授業内容を、総科の看板と称するにふさわしいとは思っていないという事実である。

しかし、一方では、看板であるべきだとも思っている。その理由は、現在のプロ通の授業に十分満足していないが、授業そのものの存在意義は認めているということではないだろうか。では、こうした原因はどこにあるのか考えてみたい。

1つ目の原因は、学生の意識と教官の意識のずれにあると考えられる。教官は、プログラミング通論の授業は、まったくの初心者を対象に行っているつもりだが、初心者の学生は、プロ通の授業はある程度の知識を持っている人を対象にしていると感じている。ではこのずれは、どこで生じているのだろうか。初心者の学生にとってコンピュータは、まったくの未知の世界であり、不安な気持ちでプロ通の講義を受けに来ている。そのような状態の学生がいきなり意味不明の用語を聞いたらどうなるだろう。結果は見えている。学生は困惑するし、さらに一部の学生が理解している様子を見て、あせってしまうだろう。もはやこの時点で学生は、わからないという状態に陥っている。授業はどんどん進むが、自分には何をやっているかわからない。だから授業がおもしろくないという現象になる。

次に実習の少なさである。授業での実習時間はというと、たった1日、それもコンピュータの動かし方をプリントでもらい、それを端末室でやるだけであった。それ以来、PASCALの授業では6回のレポート提出、FORTRANは夏休みまで課題が出ず、それまで最初の一回しかキーボードに触らないという具合であった。学生の自主性に任されていたので、学生には実習がなかったと感じられるのだ。プログラミングを学ぶ授業で、実習が少ないというのは、致命的にはならないが、プログラミング

を覚えるためには、プログラムを組んでみないことには上達はしないであろう。コンピュータを動かさない学生に、自主的に練習しておけというのは、無茶ではないか。まずは、コンピュータの扱い方から、教えていくべきであろう。

最後に、学生の態度であろう。これが一番の問題ではないか。学生はわからない、わからないと言っているが、わかるようになる努力を怠ってはいないだろうか、教官の授業がわかりにくいのは、私自身も感じたことがある。しかし、教官が言っていたが、「わからないのなら質問を何故しないのか。」その通りだと思う。教官は、わからないところは質問するようにと言っても、質問はまったくくないと言っている。教官のところに質問に行く学生は、大抵の場合成績の良い学生であって、わからないと言っている学生はあまり訪ねてこないそうだ。では学生は何をしているのか、という疑問が生じてくる。学生は学生なりに努力をしているが、はたから見て努力が少ないのではなかろうか。理解ができないのなら、理解しようとしてみてはどうであろう。専門の授業が忙しいというのは、言い訳でしかなかろう。全く空き時間がないわけでないのだから。夏休みという時間もあったことだ。その時に自主的に実習をすることはできなかったらうか。

最近、私には学生がプロ通に限らず他の授業でもいかに楽をするかということばかり考えているように思える。あまり努力をせずに単位を取ろうとする傾向がある。学生の勉強意欲が低下しているようだ。努力を怠っているのに良い成績を期待する。すべての教科にそのような現象がみられる。何をするために大学に来たのかを、私を含めて考え直してみる必要があるだろう。ある教官のお話では「ある事情で単位の取得を楽にした翌年は、受講者数が増加するが、成績はぐっと下がる。」とのことだ。

ここまで問題点を述べてきたが、次はこの状態を改善する方法について考えてみたい。

まず言えることは、実習の回数を増やすことであろう。プログラミングは、慣れるしかないのである。頭の中でいろいろ考えることは悪い事ではない。し

かし、組んだプログラムがどのような働きをするか、それがわからずして上達はないであろう。一番良いのは、計算機を目の前にして、講義で学んだことをその場で実行してみることだ。そのためには、端末機を増やす必要がある。最近では、端末はすべて情報処理センターにまとめられたが、それでもまだ35台である。少なくとも100台はないと、このような授業は行えないだろう。予算とのかね合いで実現できるかどうか私にはわからないが、コンピュータ教育に力を入れているというのなら、そのくらいはできないものか。

次に使用言語について考えてみよう。本年度より、FORTRAN 一言語から、PASCAL も加わり二言語になったが、それで充分だろうか。学生は、受講前に FORTRAN とか PASCAL がどのようなものか、わかっていない。だからといってどの言語でもいーと言ってもいいのか。コンピュータ言語の中で、初心者にとって一番とつき易いのは、おそらく BASIC であろう。教官は言う「BASIC では、たいしたことができない。あんなものは遊びである。」しかし、プロ通の授業でどれだけのことができたというのか。どうせたいした事ができないのなら、BASIC でもかまわないのではないだろうか。学生は、マスターできない高級言語よりも、簡単な BASIC の方を好むであろう。専門でプログラミングを必要な学生だけが、高級言語を学ぶようにしたらどうか。

次に、経験のある学生と初心者の学生を一緒にして、講義するのが間違いではないか。すなわち講義を能力別に行うというのが理想的なのだが、しかしこれには大きな問題がある。基準をどうするかである。おそらくこの形式を実施した場合、一番易しいクラスに学生が集ってしまうだろう。結局は学生にやる気さえあれば、どのような形にしろ、プロ通に問題はそうは起きないはずである。

教官の数によってもいろいろと制約があるので、そんなに講義数を増やすことはできない。おそらく現在の2講座で限界だろう。その中でいろいろと考えていくのは、少々難しい。

最後にプログラミング以外のことをするというのは、どうであろう。例えば、ワープロとか、情報処

理とか、この事について考えてみた。確かにそうすると、初心者の学生は満足するかもしれない。しかし、そのようなことを学ぶのに15回という時間が必要か。2・3回あればいいだろう。わざわざ大学の講義でやることかという疑問が残る。

プロ通に対して学生は、ある種の期待をもって受講しに行く。終わってみると、期待がはずれたという学生が多い。学生の期待とは何であろうか。学生はプロ通を学ぶことで、何かコンピュータの知識を手に入れたがっている。ところが何も身につけていないと感じるから、学生は不満を言う。教官はどうして、高いところから見えていないで、初心者の学生の位置まで、下りてきて初心者の学生の目で私たちを見てくださらないのだろうか。そうすれば少しは、学生とのレベルの違いが埋まるかもしれない。

プロ通は必要かという意見もある。こんな難しくそして将来なんの役にたたないものなどやりたくない。この考えは、少々誤っていると思うが、ここまで考える学生もいるのである。教官方は、もう少し講義形式を考えて授業をしていただきたい。学生もまた、本分である勉強にもっと力を入れるべきである。プロ通をもっと楽しみながら学んでいく。これが一番いい形だと思うが。

(文責 桑原 秀行)

## 新任紹介（その1）

### 新 畑 茂 充

着任後すでに5ヶ月間が経過しました。したがって、新任の挨拶といっても新鮮さに欠けますので、その間に感じたことを2～3点述べることにし、新任の挨拶にかえさせていただきます。

まず、キャンパス内の人口密度が極めて高いことにびっくりしました。前任校は3学部で、1学年の定員が380名でした。したがって、とても静かで落ち着いて仕事ことができました。しかし、本学ではそうはいかず、特に慣れるまでは学内を歩いても目がまわるほどでした。でも最近はずっかり慣れ、しかもこれが広島大学であるという感覚がもてるようになりました。

次に、移転前ということで教育、研究環境が想像以上に劣悪なことに驚きました。学内外の方からある程度は聞いていましたが、これほどひどいとは思ってもみませんでした。特に、体育実技の授業においては学生数から考えて、体育施設はこれで良いのかと疑いたくなります。しかしながら、現時点では現状以外に方法がないので、創意工夫をし頑張らなければならないと思っています。

学生のすばらしさは誇りに思います。さらに自分自身を高めるために、常に向上心をもって何事にもチャレンジしていただきたいと思います。また、学生生活を十分にエンジョイし、幅広い教育活動を展開していただきたいと思います。

最後に、不十分な環境下でもより早く研究活動が軌道に乗れたことは、非常にありがたいことと思っています。関係各位に心より厚く御礼申しあげます。また、初心にかえり益々がんばりたいと決意を新たにしていますので、ご指導ご協力くださいますようお願い申しあげます。

（生体行動科学コース・保健体育講座）

### 秋 葉 節 夫



本年4月1日付で東北大学から赴任しました。北関東は茨城県の出身です。私の場合、広島はこれまでまったくの未知の土地で、見るもの、聞くもの、すべてが新鮮でした。もっとも親戚はおろか、友人・知人もないわけで、心もとなさから「ホーム・シック」にもかかりました。恥しい話しですが、仙台の友人に長電話をしたりで、まるで親元へ電話をかける新入生のような有様でした。しかし、そんな新生活のスタートを切ってからもう半年がたちました。現在では、広島の自然の美しさを求めて疾駆する「余裕」もでき、また広島の街並やキャンパスにも心安さを感じるまでとなりました。

私の専門は社会学で、主要には社会構造論を専攻しています。社会学は漠としたもので、「社会学者の数だけ社会学がある」と悪口を言われることがよくあります。確かにそのようなところがあることは否定できませんが、私たちの日常生活に見られる共同的なものを「個人と社会」の関係如何というテーマに即して研究する点では、やはり共通項はもっています。こんななかで、私の場合は、マクロ理論として、階級・階層の理論的研究をまずはテーマとしています。階級・階層の問題は、人の自由や平等ということと関わりが深いので、これまでもその時々状況に応じていろいろに論じられてきています。例えば、日本の場合でも「一億総中流」などと論じられたことがありました。また欧米でも70年以降に、「新中間階級」という形で論じられてきています。しかし、議論のわりにはその意味・内容は多様なままで一致はしていません。そんなわけですから、今日の段階に見合った理論として、ということは、今日提起されている問題に応じられるように整理・検討することが課題となるわけです。

もう一方では、ミクロ理論として生活研究をもテーマとしています。私たちの生活が階級的に規定されているということは、生活そのもののレベルで、たんに生活の組み立て方のみならず、生活意識をも含めて捉えられるときはじめて明らかになるものです。その点では社会学の実証科学として発展してきた伝統に依拠して生活の実態把握をおこなうことが重要なわけです。こういうわけで、いわばマクロ・ミクロの両方から社会構造に接近して、階級的生活論を展開するのが研究の方向と受けとめています。

ついでながら、最後に一言。広島にあっては酒は広島の地酒（たしなむ程度ですが）、野球は広島カープをと考えています。宜しく願います。

（社会科学コース・社会学）

# 昭和63年度総合科学部一生成生沼田合宿研修に関する報告

編 集 部

去る9月3日(土)、4(日)、広島工業大学沼田校舎において総科63生に対するコースガイダンスのための合宿研修——沼田研修——が実施された。今回の研修は、昨年実施された研修の反省をもとに若干の手直しがされた。以下その点を中心に今回の研修をふり返ってみたい。なお、参加者は、総科63生145名、教官18名、事務官7名であった。

## ○全体ミーティング(3日14:00~16:00)

最初に天野学部長のお話があった。

「知る者は好む者にかなわない、好む者は楽しむ者にかなわない」という孔子の言葉を引用されて、「基礎的な学力習得の苦みを早く乗り越え、学問の楽しさを味わってほしい」と述べられたのが印象的だった。

次に7コースについてそれぞれ10分間の説明があった。

この全体ミーティングに関しては「4月のガイダンスと同じ」「時間が長すぎる、もっとポイントを押さえた説明を」「やる必要がない」などの批判も出たが、一方、「4月の時点と今とでは興味の対象が変わっているので参考になった」「他のコースが何をやっているか知りたい」などの肯定的意見も聞かれた。

この企画は、ほとんど儀式<sup>せしモノ</sup>と化しているのも、熱心に聞いている学生は少数のようだが、「単なるコース決定の資料にするだけでなく、総合科学部全体の姿を知り、総合科学部とは何かを理解してほしい」という教官側の思いが込められている。関心のあるコース説明だけを聞くのではなく、もっと余裕をもった視点から全体ミーティングを捉えてほしい。

## ○班別ミーティング(3日18:30~20:30

4日9:00~11:00)

班別ミーティングは、学生を希望コースごとの班に分け、各班に1人ないし2人のコース関連の教官に参加してもらい、学生と教官が自由に話し合う中で、学生側の疑問点を解消しようというものであった。10人前後の小グループを14班つくった。

今回の研修の最大の特徴は、この班別ミーティングを二回実施したことだった。これは複数のガイダンスを奥深く聞かなければ志望コース決定のための研修の意味がないのではないか、という学生側の強い要望から発したものであった。この企画は、第一志望、第二志望の両方のコースを詳しく知ることができたので、学生側には大変好評だった。特に、コース選択でいろいろと迷っている学生にとっては大いに参考になったであろう。沼田研修は班別ミーティングによって成功したといっても過言ではない。

1日目はグループ内の発言が少なく、司会が苦勞した班もあったようだが、2日目は雰囲気にも慣れて、満足のいく話し合いができたようである。

「何か質問がありませんか、と言ってもみんな黙っているのが困った」とは、ある司会者の弁。発言をするのはなかなか勇気のいるものだが、問題を解決する絶好の機会を生かさぬ手はない。積極的な質問が望まれる。今回筆者は学生側の下調べの必要性を痛感した。班別ミーティングの前に、資料展示に足を運んでおくと良かった。



## ○総括

前回の沼田研修には、全体ミーティング、班別ミーティング（1回）の他に、文理別ミーティングというのがあった。

文理別ミーティングは、文系コース、理系コースに分かれて、班別ミーティングでの疑問点をなくすという目的のものだったが、「人数が多いと発言がしにくい」などの意見が出て、今回は却下された。かわりに班別ミーティングが2回行われたわけだが、班に加わる教官が1人か2人なので、自分の専門外のことを質問された場合に答えられないという状況がしばしば見受けられたのが欠点であった。文理別ミーティングではこの欠点が補える。復活するかどうかは今後の課題であろう。

懇親会・レクリエーションについては、学生側教官側ともに好評だった。特に懇親会は内容が工夫されていて、教官が参加して楽しめたのが良かった。

資料展示もかなり評判が良かった。これだけで教官側の要望も伝えられるし、学生側の疑問点も解消できる。一見の価値あり。見ていない人、もう一度調べたい人は、厚生補導係へどうぞ。

合宿の行われる時期については、いろいろな意見が出たが、後期が始まる前がよい、という意見が多かった。「励みになるので前期試験の前がよい」「前期試験が終わって落ちついてから」などの意見もあった。

昨年は10月下旬に行われたが、準備が試験期間にぶつかって、連絡委員に大きな負担がかかってしまったらしい。

今回はちょうど夏休みの終わり2日だった。夏休み中で班別ミーティングの司会者との連絡や当日の出欠の確認がスムーズに行われなかったのが問題だった。点呼の報告の不手際で出発が30分遅れるという事態が生じた。

今回の研修は、全体的に連絡がうまくゆき届かず、だらだらした感があった。

「役員は締め方が足りなかった。本気になって、意識を持ってやってほしい」という教官の厳しい指摘も。

期間については、「慌ただしかったので、もう少し長くしてほしい」という意見があった。3日間にすれば、全体ミーティング、班別ミーティング2回、文理別ミーティングというメニューも不可能ではない。ただし、「時間をもて余した」という感想もあっ

た。やはり、今後の検討次第であろう。

その他「もっとたくさん教官に参加してほしい」「3、4年生や大学院の人にも参加してほしい」という意見があった。

合宿研修は教官にかなり負担であるようだ。予算の関係もあって、人数を増やすのは難しいだろう。

3・4年生が企画して、大学院生にも参加してもらおうという案は昨年も出されたようだがその場合、人選に問題が起こったり、コースの奪い合いや、極端なPRが行われる危険性がある、あまり受け入れられなかった。

沼田研修は、コース決定が第一の目的ではない。合宿という形式をとって、学生と教官が触れ合い、友人同士がより絆を深めていく中で、総合科学部とは何かを考え、その理想を求めていくことに意義があるのである。

このことを頭に置いて、各自沼田研修を振り返ってみてほしいと思う。

以上、おおざっぱではあるが、筆者なりに沼田研修について検討してみた。独断と偏見で話を進めたので見苦しい点もあるだろうがどうかお許し願いたい。

最後に、準備の段階からたいへんお世話になった学生生活委員の先生方、事務の方々、当日参加してくださった諸先生方、それから学生を代表していろいろな企画を練った連絡委員の皆さんに心から感謝の意を表したい。

“御苦労さま。ありがとうございます。”

沼田研修は、成功しました！”

THE END.

(文責 山崎 明子)





広島は案外田舎だな。当地に赴任して来るまで、まだ一度も列車や市電等に乗ったことのなかった田舎者の印象である。なんせ、やたらと畑や田圃、また緑の山々が目につくのである。しかし、その田園風景や穏やかな山々の緑が目心地良く気に入っている。それは幼少の頃の感覚を呼びおこしてくれる——石炭岩の白い道、道端の雑草のにおい、ひんやりと汗をなでてゆく木陰の風を。

広島大学の規模は、思っていたより小さい。多分、アメリカでバカでかいキャンパスを見慣れていて、ついそれと比べてしまうからであろう。母校の一つである琉球大学は、小規模だが古都のあった首里の丘にあった。が、現在琉大は西原に移転し、広大なキャンパスにモダンな校舎の立つ大学に変容している。小規模ながらも、古の雰囲気のある首里の丘に立つ琉大の方が情緒があったように思う。

総科英語講座は派閥もなさそうだし、アカデミックな雰囲気があり、良いところへ就職できたと心から思っている。私の専門は言語理論となっている。アメリカの大学で、Linguistics を少々噛ってきたからである。学生を前にして教壇に立つ本人は、自分を advanced student だと思っている。昨年三月に米国から帰国し、故郷の沖縄で約一年間、非常勤講師として教えていたが、先生と呼ばれるのに少々抵抗があった。先生と呼ぶ立場にあった期間が長かったせいもあり、どうも先生と呼ばれるのが気恥ずかしかったのである。が、だんだんとそれにも慣れてきた。

私が大学生の頃は、友人と共に先生の宅へ押し掛けていったり、コンパへ半ば無理やり誘って、難問、奇問をぶちまけて鬱憤をはらしていた。今時の学生はどうなのだろう。私のいたアメリカの大学でも、講義の後先生を誘って Cafeteria でコーヒーを飲みながら質問をしたり、あるいはまた Pub へ飲みに行きそこで議論をした。そういう場で学ぶものがまた講義中に教わるものと一味違って、案外美味で脳裏に焼き付けられるものがあったように思われる。  
(外国語コース 英語)

小林 ひろ江



港(名古屋)の近くで育ったせいか、外国人は見慣れていました。外国人と話してみたいと思ったのは高校生になってからでした。ある日、電車の中で座っている外国人に思いきって話しかけました。私は学校で習った英語の単語を次から次へと思い浮かべ、しどろもどろになって話しました。ところが別れ際になってアメリカ人と信じて疑わなかった相手がロシア人であったことにあって驚いてしまいました。その瞬間、外国人＝アメリカ人という思い込みが私の中で崩れて行きました。

アメリカに渡ったのは社会人になって四年目の時でした。英語教師として「英語」をもっと勉強したい気持ちと「外国」への憧れがあったからです。最初の二年間は、ミズリー州の小さな町にあるノース・イースト・ミズリー大学で学び、その後、ニューヨークに出てからは、コロンビア大学のティチャーズ・カレッジ(大学院)で勉強しました。私の専門は英語教育ですから実践の経験は貴重です。勉強のかたわら、ニューヨーク市立のコミュニティ・カレッジで移民の人たちやアメリカの大学で勉強しようとする外国人学生たちに英語を教えました。初めて教室に立った時、東洋人の教師に向ける生徒たちの疑いと驚きの目に私の声も震えました。十三年間過ごしたアメリカのあと、私はフィリピンに向かいました。アメリカ定住をみざすインドシナ難民の英語教育に関わるためでした。生徒たちの中には文盲に近い人から高度な教育を受けた人までいました。焼け付く屋根の下ではとぼしる汗をぬぐいながら一生懸命フィリピン人教師の英語に聞き入っていた姿が忘れられません。

英語は英語を母国語としない人たちとのコミュニケーションを可能にします。十五年間に及んだ私の外国生活を豊かにしてくれたものの一つはこういった人たちとの繋がりでした。今日、日本の国際化が進むなか、英語は英語母国圏の人たちだけでなく非母国圏の人たちとのコミュニケーションにも大いに使われています。これから益々重要になる「国際語」として英語について、また日本人にとってより効果的な英語習得法など、英語に関わる様々な問題を学生の方々と共に考え、語りあいたいと思っています。  
(外国語コース 英語)

## 新任紹介（その3）



王 延 平

わたしは中国上海市復旦大学外国文学言語学部の教師で、ことし四月復旦大学・広島大学友好姉妹校の学術交流協定に基いて来訪したものである。広島大学に来るのは初めてではない。昨年四月復旦大学代表团と一緒に広島大学を訪問し、広島大学62年度入学式に参列した。沖原学長を始めとする広大のかたがたの熱烈な歓迎を受けた。そのときから両大学間の正式的な学術交流が始まったのである。ここでわたしは“正式的”という言葉を使ったが、実はいままでいろいろなかたちの交流があった。一九八三年広島大学教師訪中団は復旦を訪問した。一九八五年元図書館長古田敬一先生は復旦で国際学会議に参加された。一九八六年総合科学部の水上孝一先生も復旦を訪問された。わたしの老朋友（古い友人）小林文男先生は一九八三年以降ほとんど毎年の春広大の学生訪中団を連れて復旦大学にきて、わたしは日本語科の学生を連れて迎えに行った。復旦のキャンパスで日中両国の大学生交流が行われている。そういう着実な交流の上で両大学の友好提携 学術交流協定の締結を迎えた。一九八六年十月六日沖原学長が広島大学代表团を連れられて復旦大学に来られた。そして両大学の友好提携をされた。その後、広島大学教育研究センターの喜多村和之先生・センター長関正夫先生も相次いで復旦大学を訪問し、講義されたこともある。今度は逆にわたしが広大の教官として迎えられて大変光栄に思うと同時に、数多くの先生方に会えるし、新朋友を作れることにとっても嬉しく思っている。次はわたしの経歴についてごく簡単に紹介させていただく。

一九五九年大学卒業。専攻はロシア文学である。一九五九年九月一日復旦大学外国語文学言語学部ロシア語専任教官として着任し、一九七〇年に日本語科を作って、日本語科主任教官となった。日本語は独学したもので、その後一九八一年から八三年まで東京外国語大学で研修した。研究領域は中国語・日本語の語彙比較、教授法、テキスト作成など。著書は上海市ラジオ日本語講座（中級・上級）、中国語初級読本（白水社）、ロボット世界の注釈、日本語課外読物など多数ある。大学時代の趣味は卓球・野球と社交ダンスであった。いまは博物館の見学、民俗行事に大きな興味を持っている。

（外国語コース 中国語）

## 私の第一印象

高 島 敏 郎



かつて当大学の付属高校の受験に失敗した私が、教官として迎えられるという巡り合わせになったのは、どうも、故岡本先生を初めとする諸先生方が、私の専門分野、つまり、高温超伝導体や磁性体などの材料開発を進める分野を充実する事が必要だと考えられたためらしい。ともかく、その期待に応えなくてはと決意して参りましたので、よろしく願います。

いくつかの大学と研究所を経てこの総合科学部に来た私にとって、見慣れないもの、耳慣れないものがいくつかあります。そのひとつは、半ば物置と化した廊下です。この惨状は西条移転に伴って改善されるはずですが、不必要な物まで西条に持っていかないためには、それらを今ここで廃棄する決断を下し、廃棄のために労力を割く必要があるでしょう。耳慣れない方は、毎日15回鳴り響くチャイムです。こんなに何回も鳴ったのでは、朝から晩まで授業に出ている学生さんを除けば、どれがどれなのか判り難いのではないのでしょうか？また、チャイムの真下を通っている時に鳴ろうものなら、耳を被いたくなる程の音量にも閉口します。果して、大学というところで、チャイムによって授業の開始を全館にあまねく知らせる必要があるのか否かという議論は、今はさて置くとして、とりあえず次の様な変更を提案させていただきたい。

1. チャイムを鳴らすのは、1・3・5・7各時限の開始時のみとする。なお、二部の授業開始は必要ならば、当該教室のみで鳴らす。 2. 土曜日の午後、日曜祭日は鳴らさない。 3. 音量を適度に下げる。 4. 現在一回のチャイムは八個の音階を二度繰り返しているが、これを一度とする。 5. 廊下に備え付けの時計の数を増やす。

新任のあいさつが、こんな問題提起になってしまいました。皆さんも一寸考えてみてはいただけませんか。

（教理情報科学コース 基礎科学研究）

平 藤 王

# 所得の平等と製品市場

数理情報科学コース 磯 道 義 典

所得はなるべく平等で在ることが理想で在るか、国民が一生懸命励むためには多少の不平等が存在するほうが望ましいとかの議論がある。私は本稿において多少異なる観点からこの問題を考えてみたいと思う。この新しい観点というのは消費物資の市場のスペクトルが広くしかもなだらかに分布することの重要性とこの様な分布を持つ国とそうでない国とではその国の産業の発展力に大幅な差が生じるであろうことである。

最近の製品例として日本語ワープロを考えて見たい。最初の日本語ワープロは1980年東芝の森健一によって発明された。そして最初の同商品は約600万円の価格を付けられていた。この高価の日本語ワープロを実際に購入したのは極く少数の大企業だけであった。しかしこの新しい商品の魅力は素晴らしく各家電メーカーが競って製品開発を行いより安くより便利なものに改良していった。特にその価格の低下速度はすざましく約16ヵ月毎に半値になるというものであった。最近では10万も出せば最初の日本語ワープロよりも高性能の物が手に入る様になった。安くなったせいで家庭にも普及する段階に達した。

ワープロだけでなく電子計算機でも最初の内は高価であるため大企業が政府機関くらいしか購入しないがしばらくして多少安くなると中企業や地方自治体などが購入するようになる。更に安くなると小企業や超高額所得者が購入をはじめ、更に安くなると商店や高額所得者が続く。最後に購入開始するのが普通の個人である。

この様な購買層の推移に着眼すると製品の開発普及をスムーズに行わせる為には各購買階層がとぎれなく並びしかも下ほど多数になっている事が重要である。勿論現在の日本はこの様な構造になっているものと思われるが、世界を見渡してあまりうまく発展出来なくて困っている国々の中にはこうした点で問題を抱えているものがあるのではないだろうか。

多分共産圏国家は企業的な部分と個人的な部分の間には大きな欠落階層が存在するのではないかとと思われる。またこの様な観点から見るとアメリカ合衆国の様にべらぼうな高額所得のエグゼクティブと一様所得の労働者が多数存在しいわゆる中間層に乏しい社会も危険の様に思われる。この点では日本の年功序列賃金体系は思わざる貢献をしているのかも知れない。また将来の高齢化社会に於いて年金所得階層が所得階層スペクトルに於いて際立った孤峰を形成しないように年金額をばらつかせる様に工夫しなければならないであろう。

1988. 9. 29

社会科学コースで政治史を担当する安野正明です。私自身ファンである安野光雅という著名な絵本作家のおかげか、初対面の方に“あんの”と呼ばれることがあります。姓は“やすの”と読み、“あんの”ではありません。『経済白書』が「もはや戦後ではない」と書いた年の9月3日（乙女座）に神奈川県川崎市に生まれ、育ちました。

大学院時代所属していた専門課程は一応国際関係論でした。総合科学部の諸君も感ずることがあるかもしれませんが、色々摘み食いをしたけれどいったい何が自分の専門なのかわからなくなりました。国際政治学では政治学の専門家に、国際法では法律家に、国際経済学では経済学部出身のエキスパートに圧倒され、戦後ドイツ史を専攻することに決めてから文学部西洋史学科に行けば「そんな新しいところ歴史？」と言われ、ふきだまり専門課程の悲哀は身にしみてわかっているつもりです。

私は根無し草的な院生だったのですが、専門課程のスタッフで唯一のヨーロッパ現代史の専門家であった関係で指導教官をお願いすることになったN先生は、厳格な実証史家でした。ある論文を読んでいただいたのですが、論文の註を崩され、史料の杜撰な引用を指摘され、自分で史料にあたって十分調べず要領よくまとめた所や推論に推論を重ねた所は赤鉛筆が入り、国際関係論の借り物の当時流行の理論や概念で取り繕った苦心の箇所は借り物であるがゆえの虚構性をつかれ、単なる言葉の遊び・概念のゲームにすぎぬことをあばかれました。そして最後に、「確かに一見よくまとまっているようにみえる。しかし、歴史学の学術論文とはみなしえない」と恐れ目で見られ、論文を突き返されました。

その時の身のすくむ思いは、いまでも忘れられません。しかし、この恐ろしかった数十分間が今にいたるまで自分にとって原体験をなしているものです。能力ゆえの限界はありますが、調べ尽くせるだけ調べ、史料にあたるだけあたり、借り物の理論には頼らず、その上で确实と確信できたことがらをひとつひとつ積み上げていく愚直な方法を次第に取るようになっていきました。大学院受験を決意した頃は、こうなるとはまったく考えていませんでした。この方法でなければいけないとは思いません。ただ、自分はこのやり方で歴史学・政治史の勉強をしてゆくという方向は変わらないと思っています。

（社会科学コース・政治学）

石 樽 清 司



このたび、総合科学部保健体育講座に、助教授として奉職することになりました石樽（いしぐれ）でございます。どうぞ、よろしくお願い致します。

本年3月まで、京都府立医科大学衛生学教室で、環境衛生学（温熱環境）を中心として、運動・体力、栄養、学校保健などの各分野に関連する研究に約14年間従事してきました。これまで研究一筋で、教育ということについては二の次でありましたので、本学で沢山の学生諸君を前にして授業を行うことに多少不安があります。

本学では、一般教育の保健体育学、生体行動科学コースの運動障害学、健康科学実験などを担当することになっております。これまでの研究が、授業でどの程度役立てられるかはわかりませんが、少なくとも健康科学実験で予定している各種の健康度調査は、学生諸君の健康についての関心を高めると同時に、私の研究成果が発揮されるであろうと思っております。

さて、この広島のは、私にとりましては高等学校時代（岐阜・加納高等学校）に修学旅行で訪れて以来で、4月にこちらに赴任して参りました時は、右も左もわからない土地でしたが、諸先生方の温かいご配慮のおかげをもちまして、昼の広島、夜の広島の右と左が多少分りかけてきたところです。研究室の方も、ようやくコンピュータ、冷蔵庫などがそろい、研究と教育に取りくめる体勢が整ってきたところです。広島については、まだわからないことばかりですので、アルコールの研究も行っている私としましては、冷蔵庫内いっぱい詰った麦汁を酌み交しながら、お教え願えればと思っています。

（生体行動科学コース・保健体育）

## 「学生クルマ事情」



学生時代、春休み・夏休みの一回分を自動車免許取得のために費やす人が多い。数年前に比べて、自分の車を購入したり、便利なレンタカーを利用して、自分なりの楽しみ方を満喫している学生がますます増えてきた。ペーパードライバーで四年間を過ごし、社会人になって突然恐る恐るハンドルを握る学生が少なくなるかどうかは別として、車は娯楽品感覚で受け入れられつつある。免許さえ取れば、誰でも乗りたい時に乗れる時代になった。

勿論、学生が車を運転することについては、様々な意見があるだろう。運転技術の未熟さ、車の購入費用など、私達がいくら頑張っても、周囲は心配しがちなものである。反対に、私達学生の方では、何だかんだと理由を付けながら結局全て「大丈夫だから」という一言に収めようとする。

車を運転する大学生が皆、事故を起こすわけではないし、《万が一の場合》に遭遇する人は全体数としてはわずかなのかもしれない。しかし、「万が一私が・・・」ということを常に頭に片隅に置いて運転している者がどれだけいるだろうか？学生ドライバーだけの問題ではないが、特に民事的責任を一人で償うことのできない私達にとっては、最も気を付

けなければならないことの一つである。これほど身近で、しかもこちらから原因を作らなくても巻き込まれる可能性の高いものはないのだから。

今年は広島だけでなく、全国的に交通死亡事故が多いことは、周知の事実である。人々に警告を与えるかのように数字は増え続ける。その警告を正しく理解することがセイフティ・ドライバーへの第一歩である。

山陽自動車道も粗方完成しているので、車一台あれば行動範囲はグンと広がるだろう。時には解放感を存分に味わうのも良いし、「趣味は？」と聞かれると、迷わず「車」と答える人も少なくない。そんな人達こそ、無事故・無違反を心掛けてほしいものである。

(文責 下野 寿子)

## 新任紹介（その5）

田原光広



昭和63年4月1日付で、総合科学部の地域文化コースの助手から外国語コース英語講座のスタッフの一員に加えさせていただきました田原光広と申します。

私が鹿児島から広島へと、島から島へと渡って来ましたのは昭和49年、カーブ初優勝の前年でございます。あれから、5年間を教育学部で大学院の2年間を総合科学部で過ごし、その後、広島の私立大学で教壇に立つ幸運に恵まれ5年半を過ごし、そして御縁をいただき母校に帰ってきて今日に到っております。すでに広島に来て14年余りが経過し、鉄板の上のお好み焼きを切っては口に運ぶ「へら」の手付きも堂に入ったものとなり、カーブを中心にプロ野球は回っていると思込んでいる自分にも気付かなくなり、広島に来て初めて口にした時不気味な食物としか思わなかった「ナマコ」を酒の肴にお代わりするようになり、そして何よりも、私の心の中で「行く先」であったはずの広島が「帰る先」に変貌したその時に、広島は確かに私の第2の故郷になったような気が致します。

現在、法学部・経済学部・工学部・理学部の1・2年生の英語を教えておりますが（教えると言うよりはむしろ、教えつつ自分が学んでいると言った方が正しいのかもしれませんが）、彼らに教えていてひとつだけ心に引っ掛かることがあります。それは彼らの声の小ささです。もちろん、学部によりクラスにより個人により若干の違いはありますが、指名しても小声で呟くように話す学生が男女を問わず多い点は変わりがないように思います。自分の言葉が相手に伝わってゆくかどうかにかかわらず、ファミコンの画面に向かってでもいるかのように「独言」を呟く学生が多いように思うのは私だけでしょうか。それは、とくに今に始まったことではないのでしょうか。声の大小だけなら個人差の問題として片付けたらよいのですが、その背後に他人との意思疎通を拒む「独言の世代」が潜んでいるとしたら、それは安易に見逃すことのできない問題のように思うのです。

学生の教育にしろ、イギリス・ロマン主義文学の研究にしろ、全くの駆出で蓄積と呼べるほどのものは殆ど何ひとつない私ではございますが、何卒宜しくお願い申し上げます。

（外国語コース・英語）

堤 誉 志 雄



早いもので、私が広島大学総合科学部に採用されて4年目になりました。今回助手から講師に昇任するにあたり、御挨拶を書くことを頼まれましたので、この3年間総合科学部に居て感じたことを述べることで、それにかえさせて頂きたいと思えます。

総合科学部創設の理念を表わす言葉として、「学際的」という言葉が良く使われます。この言葉は普通、物理学と生物学の間、生物学と化学の間、あるいは自然科学と人文科学の間のような異なる学問の間の境界分野を研究するというような意味に使われるようです。このような説明を聞くと、何となく「学際的」という言葉の意味が分ったような気になるのですが、実際にそれを実行しようとするとき色々な障害にぶつかります。それでも教官の場合は大学という所は何にも拘束されずに自由に研究を行なう所であるという原則がありますし、また自分の専門的立場ははっきりしているということもあり何とかこの「学際的」という理念とつきあっていくことができますが、学生の場合は随分と振り回されることがあるようです。特に理系の学問の場合、一つの分野に専念するにしろ学際的な事をやるにしろ、一つの学問のそのまた一つの分野を徹底的に掘り下げて研究するということが必要不可欠で、そうでないと他の分野との係わりが理解できないという事情があります。このことは文系の場合でも少なからず同じ事が言えると思えますが、結局ただ色々な授業を聞いただけではあまり意味がなく、どうしても一度一つのことを掘り下げる必要があるということです。

しかし、大学生活の4年間というのは幅広く勉強し、かつ一つの事を掘り下げるという作業をするには短かすぎるようです。それで総科の学生達は悩み苦勞するわけですが、私はそういうことを悩み苦勞するだけで総科に来た甲斐があるのではないかと考えています。そのことは必ずこれからの人生に役に立つことでしょう。学生諸君の頑張りに期待します。

（数理情報科学コース・基礎科学研究）

# 「隣の芝生」～通則第19条の活用実態～

## 広島大学通則第19条

「学生は、他の学部の授業科目を履修することができる。この場合は、所属学部長を経て当該学部長の許可を受けなければならない。(抜粋)」

皆さんの中で、他学部の授業をとったことのある方は、どのくらいいらっしゃるだろうか。総合科学部の学生便覧には、自由選択科目の中に「他学部の授業科目を含むことができる」と明記されており、その単位数は社会科学コースが12単位までの外は、各コースとも8単位までとなっている。

さて、本題はその活用実態であるが、63年度前期において、総科生が他学部の授業をとりに出ている人数、及び他学部生が総科の授業をとりに来ている人数は、(表)に挙げる通りである。

表1)他学部から総科への通則第19条による聴講者数(63年度前期)

学部名	聴講願い出人数	聴講願い出件数
文学部	56	98
教育学部	31	47
法学部	12	26
経済学部	17	21
理学部	4	4
工学部	3	3
学校教育学部	1	3
計	124	202

数字の上から見るに、総科生の19条活用者数は相当多数であり、物好きで、出たがり…ではなく、学際性豊かな総科生の傾向が読みとれる。

ただし、これも教職員免許や学芸員の資格のためにとりに行く人が多く、それを除けば70人くらいになってしまう。

資格以外の目的で聴講しに出ている学生にお話をうかがうと、「総科にはない授業だから」、「他学部の様子を知るため」、「選択の幅を広げるため」という理由を挙げる向きが強く、また、他学部の授業の雰囲気は? という質問には、「総科と違って範囲が狭く、(内容が)深いと思う」、「他学部生はまじめそう」…という答えが返ってきた。

総科生の選ぶ他学部の講義の中味は、これといった指定もないため、資格用から個人的趣味まで様々であるが、逆に他学部から総科へ講義をききにくる学生の選ぶものは、自由に選べて卒業単位になる場合(例えば理学部の一部の学科で4単位以内など)と、「教室で毎年発表される関連科目(卒業単位に含めることを承認された科目:便覧には載らない)の時間が今年は都合が良いので、文学部の地理学専攻生が大量に『社会調査法』と『イギリス地域研究』をとりきいている。文学部にこういった授業はなく、人文地理を学ぶ場合に有意義で面白い」(文・地理62生)というように科目を指定されている場合とがあり、実際は後者のケースがはるかに多い。

ただ、ここで面白いのは、どちらにしても文系科目と理系科目との比が2:1くらいになっていて、本さえあればどこへでも出かけて行ける文系学生と、教官によって内容がまったく異なり、他学部などへ入るスキがない上、日夜実験に明け暮れる理系学生との相違が顕著に出ているということだ。

ところで、大学院生も実はこの通則第19条を活用することができる。総科関係の大学院の場合、のべ95人(社会科学研究科66、生物圏科学研究科26、地域研究研究科3)の院生が総合科学部や、他学部、他研究科の講義を聴講しており、また、僅かながら他の研究科から総合科学部へ聴講にくるケースもある。

表2) 総科から他学部への通則第19条による聴講者数、( )内は資格に関するもの

学部名	聴講願い出人数	聴講願い出件数
文学部	27(9)	31(9)
教育学部	45(28)	57(36)
法学部	9	11
経済学部	8	13
理学部	19	29
計	108	141

中で、社会科学研究科の博士過程前期(マスター)のみ、自由選択科目16単位のうち、「他専攻、他研究科の専門科目より最低4単位」をとることが義務づけられている他、生物圏科学研究科でも、「指導教官が必要と認めた場合」、他研究科の科目の単位が取得できるしくみになっている。

「文学研究科の講義をとっているが、修了単位※にはならない。総科の大学院は学際的で、理念としてはよいが、就職のときに自分の業績を出さねばならず、それにはやはり専門的にならざるを得ない。現在、学際的といえるのは国際社会論専攻だけが、「総合大学院」の色彩が強くなりつつあるのも最近の傾向」(社会科学研究科・D62生)

尚、院生が教職科目をとる場合も通則第19条の手続きが必要だが、これは無論大学院の修了単位には関係ない。

話をもとに戻すが、教官側からはこのことについて、

「総科生も他学部生も、学生の様子、試験の答案の中味など特に大差はない。ただ総科で講義をする場合には、聴講している学生がその科目を専門にしているとは限らないので、一般教育のようなつもりでまとまりのある講義になるようにしている」(総科・S教官)というコメントをいただいた。どうやら、「総科の講義は単位がとりやすい」というウワサはこのあたりからきているものらしい。総科内の講義は選択の幅が広いので、自由競争市場となっているのだ。

総科から、「隣の芝生」を覗きにいった70余名という数字は、一体多いのか少ないのか。

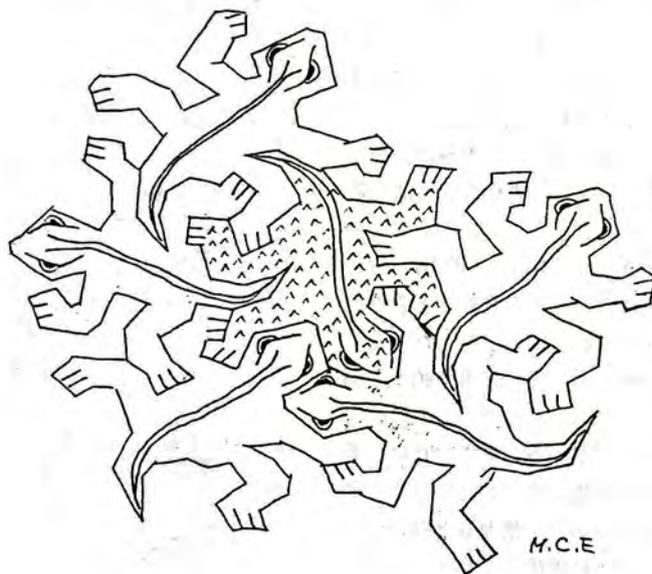
そして、私たちは本当に、与えられた「学際性」という水の中を、存分に泳ぎまわっているのだろうか。

タダでさえ他大学との接触の少ない広島大学ゆえに、せめて“単科大学の寄せ集め”からは脱皮したいという夢がある。

(文責 伊藤多喜子)

※これは19条だから修了単位にならないのではなく、履修した科目が講義だから修了単位にならないのである。社会科学研究科博士課程後期の学生が修了するためには、演習で8単位そろえなければならない。もちろんこれは他研究科の演習でもOKである。

(学務第一係註)



# 「私と野球」

## — 衣笠氏の講演 —

去る6月29日水曜日、大学会館大集会室において、前広島東洋カープの選手で、現在は東京スポーツコンサルタント、朝日新聞社嘱託、広島大学特別講師、広島カープのオーナー付きスタッフという長い肩書を持つ衣笠祥雄氏による講演が開催された。これは、



広島大学総合科学部学生生活委員会の主催による教養講座の一環であり、教養講座とは、各界の識者に来ていただいて講演等をする行事のことである。

講演に先立って、整理券が22日に配布された。1コマ目の終わりと同時に駆けつけてみると、そこにはもう長い行列。並んで待っている人の顔は、まだ整理券が取れるのかどうか、とちょっと心配顔。実際に目の前で衣笠氏の講演を聞ける学生の席数は300。「はい、ここまで」。2人の女の子の後ろに事務職員の右手が割って入る。「やったー！」とぎりぎりセーフの女の子。「あーあ」とは後ろの女の子のため息。これからは学生会館の談話室とロビーに1台ずつあるビデオで講演が聞ける整理券の配布が始まる。その数は165。これも、すぐにいっぱいになってしまった。

さて、講演である。当日は、あいにくの雨だった。みんながびしょびしょになりながら会館へと急ぐ。5分前には、会場は学生でいっぱいになった。しんと静まりかえった開場が、衣笠氏の登場で拍手の渦になる。中国新聞やデイリースポーツ、その他の報道陣のカメラのフラッシュが一斉に光る。RCCや広島テレビのカメラが衣笠氏に照点を合わせる。まず、菊地先生から衣笠氏の紹介。整理券と引きかえに学生に配布された『衣笠祥雄氏のプロフィール』のプリントに細々と書きつけてある（データはその

時のもの)。それによると、衣笠氏は昭和22年1月18日生まれのO型。身長175cm、体重73kg。広島カープに昭和40年に入団、同62年退団。その間の連続出場試合数は2215試合で、世界記録である。打数、得点、安打、本塁打など素晴らしい記録の持ち主だが、三振が1位という記録も含まれていたのには、少々驚いた。しかし、あの豪快なスイングによる三振は見ていて気持ちよく、何かスカッとするものがあった。また、昭和62年6月15日には県民栄誉賞を、同6月22日には国民栄誉賞を受賞している。

講演の題名は『私と野球』。「こんな雨の日は広島も早く帰ってきて、巨人戦に備えたほうがいいんですけどねえ」から講演は始まった。まず、入団時のこと。練習メニューを自分で決めなければならず、苦勞したエピソード。捕手で入団したが、投手が打たれると（例えそれが捕手が要求した球ではなく、投手が勝手に投げたものとしても）、文句を言われるのは捕手なのに嫌気がさし、ファーストへ。実力が認められるとともに、周りの人間関係が悩んで、オールスター・ゲームのときに相談する。いつもは「話の入口がここだと、出口はこんなところになる」長島選手がいいアドバイスをしてくれる。「衣笠、それじゃあ、お前自身はどこにいる?」。それから、

### 衣笠祥雄氏プロフィール

生 日	昭和22年1月18日
身 高	175cm・73kg
投 球	右投げ
守 備	右投手
入 団	昭和40年
引 退	昭和62年
初 出 場	340・5・16 対中日 7回戦
初 安 打	540・7・25 対大津 5回戦
初 本 塁 打	540・8・22 対阪神 15回戦
2134回出場	562・6・13 対中日 10回戦
主な通算記録と史上順位	
永年出場	23年 2位
試合数	2677試合 4位
連続出場試合数	2215試合 1位 (5.45.10.19回戦20回戦-5.42.10.22回戦23回戦)
連続本塁打出場試合数	678試合 2位
打 数	9404打数 2位
打 点	1372点 4位
安 打	2543安打 4位
本 塁 打	504本塁打 4位
4 球 打	444球打 4位
打 点 率	14.48打点 7位
打 死	161回 2位
三 振	1587三振 1位
盗 塁	287盗塁 2位
通 算 打 率	.270
オールスター・ゲーム出場	46年、49~52年、55~62年 (13回)
ベスト・ナイン	50年、55年、59年
ゴールデン・クラブ賞	55年、59年、61年
栄 誉 賞	61年(31歳)
正 力 賞	59年
最優秀選手MVP	59年
最多打点賞	59年(102打点)
打撃10傑	46年(2位、285) 47年(4位、295) 59年(3位、329)
県民栄誉賞	562・6・15
国民栄誉賞	562・6・22
広島市民栄誉賞	562・11・2
日本職金特別賞	562・11・10
現 任	東京放送スポーツコンサルタント 朝日新聞社嘱託 広島大学特別講師 広島東洋カープ オーナー付きスタッフ

衣笠氏は、人間関係を円だと考えるようになった。円の中心には自分、その次のもう少し大きい円には両親など最も親しい人。次の円には親友、5回会った人はあの円、2回会った人は……。そうやって、自分の周囲の人を決めてゆく。もし、信じていた人に裏切られても、自分が信じて、自分で決めて、この円まで入ってきてよいとしたのだから。だから、その人を恨まない。

選手・衣笠は、けがに泣いた人でもあった。数々のデットボール。最初の頃は腹も立ったけれど、連続試合等の記録が衣笠選手の前にちらちらしてくると、デットボールを浴びせた投手がすごく悪く言われる。投手だって何も好きこのんで打者にボールをぶつけるわけではないし、第一、ボールが当たった瞬間あんなに痛がって、けろっと立ち直ってファーストへ行くあの姿はみともないということで、ボールがぶつかっても、すぐに立ち上がり、投手へ片手をあげて、にっこり笑ってファーストへ行くあのスタイルへ。

不調でついに試合に出場できなかったこともあった。普段は一日に朝と昼の二食しかしない。それでナイトゲームの時にももつ。けれど、試合に出ないと緊張しないせいか、無性にお腹がすく。また、ベンチのどこに座ろうかで悩んでしまう。欠場して初めてこの2つのことに気が付いた。出場できなかったオールスター。家族と海水浴へ。そこでふっと自分は自分じゃないかということに気が付く。そのシーズンの残りの成績は前期とは比べられないほどよくなった。

衣笠氏は講演を通して「自分は野球が好きだからこそまでやってこれた。好きでなければここまでやれなかった」と述べられた。学生達は、経験に裏打ちされたその言葉に深い感銘を受けたことだろう。



講演の最後に、菊地教授から謝礼が、女子生徒から花束が、男子生徒からは、講演の最中に回されてひとりずつ感想等を書いた寄せ書きが衣笠氏に手渡された。

この企画の責任者である菊地教授は「衣笠氏は自分が苦勞したことから勝ち取った持論、信念とも言うべきものを持っていらっしゃる方だ。努力・忍耐の大事さを語ってくれ、また『本を読みなさい』というアドバイスには社会に出てからの学生の道標になったと思う。」と衣笠氏について語ってくれた。

また、これからの教養講座の企画は、留学生の座談会・シンポジウム（パネルディスカッション）、音楽会、コンピュータに関する講演会などがある。

(文責 小松千尋)

### 衣笠選手の現役時代の体力

(実線正多角形のレベルはカーブ球団全員の平均値を表わす)

身長



握力



寸評(菊地)

- (1) 皮下脂肪が少ない。
- (2) 筋力がすぐれている。



慌しく荷物をまとめ、小包を8つばかり送り、見送りの友人にしばしの別れを告げ、汗だくはなあって飛行機に乗り込んだのは離陸の直前。7年間のアムステルダム留学の感慨にふける暇もなかった。帰国したのは3月も末だったから、到着翌月には赴任先の広島へ向かい、挨拶まわり、家さがしなどに追われ、引っ越し荷物もまだ届かぬ間に授業が始まっていた。カルチャー・ショックもあまりじっくりと感じている余裕はなく、ただ、あまりに慌しい移動のせい、広島市内を歩きながら「何故、ここにいるんだろう」という奇妙な感じを味わったのをかろうじて覚えている。

4月から芸術学、美術史、比較文化論の授業を担当したが、日本の大学での仕事は初めてだし、学部や学生の性格もまだ分からず、おまけに美術史は新しい授業科目なので、はじめはまず手さぐりの感じだった。美術史や芸術学が育つための物質的、精神的環境はまだずいぶん乏しいという印象は受けた。これまで私の活動の場だったアムステルダムの美術館広場と比較するつもりはなかったものの、それでも、もの足りない感じは否めなかった。美術大学がないせい、現代美術への関心も薄いように思われた。しかし、芸術への理解や関心が育つに十分な基盤は既にあり、また、できつつあった。ひろしま美術館のコレクションは欧米の美術関係者にもよく知られているし、比治山の現代美術館もまもなくオープンする。また、金田教授の率いてこられた広島芸術学研究会は、学者のみならず多くの分野から会員を集め、会を重ねて軌道に乗りつつあり、会誌「藝術研究」も創刊された。

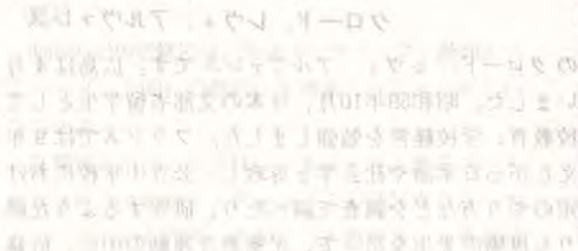
環境はできつつある。しかし、美術館であれ学会であれ、それらを十分に機能させるのは、熱意と専門知識、研究能力、そしてある種の経営能力を備えた人材であることは言うまでもない。ここで言う経営能力とはいわゆる non-profit organization を運営してゆく能力であり、美術館などに関して言えば、arts administration の能力である。

日本の学問、芸術の世界では、このような能力はしばしば軽蔑されるが、これは正しくない。もちろん経営能力のある者が優れた学者や芸術家になるとは限らないが、「不遇の大芸術家」像の多くは後の時代につくりあげられた虚像である。ファン・ゴッホには弟テオという限りなく忠実なパトロンがいたし、セザンヌには一生を芸術に捧げるに十分な父の遺産があった。教育・文化機関というものが文化のパトロンである以上、そのスタッフに経営能力が要求されるのは当然であり、アメリカの大学にはすでに Arts Administration の講座がいくつもできている。

経営能力ばかりに触れたのは美術史については授業で話せるからでもある。ひと言で形容すれば、美術史は、書斎の学であるよりもむしろ眼と足の学問であって、よい作品をひとつでも多く見て、原則として世界に一点しかない<sup>オリジナル</sup>原作を見るために、美術館だけではなく時には山奥の修道院にまで足を運ばねばならない。その意味で美術史家は芸術の巡礼者である。

昨夏、手はじめに京都を中心に見学旅行を行なった。今後も場所を変えながらより充実した「巡礼」を企画したい。近い将来、広大からよい人材が生れることを期待してやまない。

（地域文化コース・比較文化研究）



夏の間、プレハブ4号棟での地域文化実験実習室での授業が待ち遠しかった。何故って、それはクーラーが付いているから。でも本当は、プレハブ内って夏はとても暑くなる。それまで閉め切られていた実習室に最初に1歩足を踏み入ると、何とも形容し難い熱気と臭いに襲われる。空気の入替えをしようと窓を開けると、学生第2食堂から漂ってくるいい匂いと、サークル棟の音楽練習室から聞こえる楽器の音、あるいは歌声が飛び込んでくる。とてもそんな状態で窓を開け放したまま授業は行えそうにないので、授業開始と同時に窓は閉じられる。その頃までには先程からつけていたクーラーが少しは効き始めていて、実習室内は快適な湿度と温度。よし、これなら勉強もはかどるぞ、と意気込んで授業に臨んだかどうかは人それぞれだろうが、この教室はクーラーなしでは夏の間はどうにもならないだろうというのが、今年度前期、初めてプレハブで授業を受けた私の率直な感想である。

他にもプレハブ教室は何かと不便なもので、とても学問をする場にふさわしいとは言えない。いくらクーラーをいれて温度の問題を解消しても、隣の部屋から筒抜けて聞こえてくる音はどうにもならない。地域実習室での授業中、隣の教官室にかかってくる電話のベルの音に何度驚かされたことだろう。私自身個人的に、小学校時代、生徒数が過剰気味になり、学校が2つに分かれるというので、新しい小学校に移る私たちは校舎が完成するまでプレハブで過ごしたことがあり、教室で走りまわるとプレハブ全体が揺れるなど（もちろん大学ではこんな光景は見られないが）、プレハブの不便さをある程度知っているつもりである。それ故、総科に入って、そんなプレハブで講義が、実験が、演習が行われている、それどころか教官が学術研究を行っている、この現状を見て愕然としたことは言うまでもあるまい。

只今総科にあるプレハブは8棟（加えて最近はコ



ンテナまで登場している）。部屋数は総じて90。そのうち61が教官室である。総合科学部本館の教官室数が約150であるから、総科の教官は約5人に2人がプレハブ教室を使用しなければならない状態にある。西条移転を数年後に控えて、新しい建物を建てるのはたいへんだし、そここのところを皆何となく納得していて、誰も表立って文句は言わない。教官方は仕方がないと思って目をつぶっていらっしゃるのだろうか。でも、やはり私はそんな状況下で学術研究を行わなければならない教官方を気の毒に思うし、そこで授業を受ける学生だってかわいそうだと思う。西条に移れば立派な研究室、講義室が用意されるのだろうが、残念なことに、現時点でプレハブで学ぶ多くの総科生は、移転予定の昭和67年を前に卒業してしまう。時期が悪かったねで本来済まされる問題であってはいけないだろう。今日、教育は義務ではなく、むしろ権利である。だから被教育者である私たちも、できる限りの教育の場を望みたいし、教育者でありかつ研究者である教官方も同様であろう。しかし悲しいかな、実際はこんな気持ちをどこにも持っていきようがない。

そこで私は視点を変える。要は中身の問題。勉強なんてどこでだってできるし、本人の姿勢次第であるとも言える。外見ばかり飾りたてて、中身が薄っぺらいよりも、広島大学のターニング・ポイント期において、苛酷な条件にも負けず、こんなに勉強したんだよと胸を張って言える方が良いかなとも思う。

千田町から広大が消える時、鉄筋校舎は再利用されるという話がある。プレハブは……きっと取り壊されるのだろう。今は愚痴たらたらプレハブ校舎も、いつか自分の大学生活の一部として懐しく思い出す日が来るかもしれない。二食のおいしそう匂いと、時々調子のはずれる楽器の音さえ、プレハブと一緒に懐しく思い出す日が来るかもしれない。

(文責 矢野 泉)

## 新任紹介（その7）

### クロード、レヴィ・アルヴァレス



総合科学部、ヨーロッパ研究のクロード、レヴィ・アルヴァレスです。広島は4月からで、その前は3年間東京にいました。昭和59年10月、日本の文部省留学生として日本につき、東京学芸大学で学校教育、学校経営を勉強しました。フランスでは9年間小、中、高の一貫制学校で教えながら日本語や社会学を専攻し、公立中学校における組織問題や上下関係、意志決定のやり方などを調査で調べたり、研究するような経験を持っていましたが、それよりも現場の先生を狙って、民衆教育運動の中に、研修

を行ったり、それを実現したりするような経験が強く私の生活に影響を与えたと思います。つまり、そんな経験なしに、日本の教育制度や現場の状況を研究するまでにはいかなかったと思います。それを思い出しながら今の目的を簡単に語ろうとすれば、やっぱり今の日本の中学校の状態をいろんな側面を持って把握し、理解したいと思っているし、教育者たちの教育価値観と現場の実態との隔たりについて考えていきたいと思っています。

東京で生活していたときは中央大学やアテネ・フランセなどでフランス語を教えていましたが、広島にきてから初めて専任講師として授業を担当することになって、いろんな面で以前の経験と若干違う感じがします。それとって、あなたたちの期待、興味、目的などをまだ十分に理解していないと言いきれない。フランス人としてどんな風にどんな事を大切にしながら教えたほうがいいのか、それは私にとっては今後とも1つの大きな課題だと思っています。しかし、今日までは皆達との付き合いはとっても気楽で、楽しく感じています。これからのコミュニケーションがよりよく、より多くなるように私も頑張っていきたいと思っています。

終わりに私の趣味（発音が下手なのでよく臭味と間違えられているが）の1つを紹介します。それはギターを引くことですが、なかなか上達しないのでこれを早く終えて、練習に戻っていきます。

それでは……

（地域文化コース ヨーロッパ研究）

### 中 達 啓 示



はじめまして。今年4月から政治学教官として広大にやってきました中達です。関西出身なのですが猛烈な阪神タイガース・ファンという訳でもないのに、広島でも何とか「穩便」に暮らして行けるのではないかと考えています。こちらにきてあっという間に半年近く立ってしまいましたが、私のこれまでの印象では人口100万人の都市というのは大きすぎず小さすぎず正に適正規模で、毎日を快適に過ごしています。

専門分野は国際政治学で、既に4月から一般教養科目の政治学として「建国期以来のアメリカ外交史」を、後期からはそれに加え専門科目の国際政治学として「核戦略論」を講じます。何れもアメリカ社会と大きく関わる科目なので、5年半のシカゴ大学大学院での留学経験がうまく活用できればと考えています。アメリカ人のライフ・スタイルや政治感覚（あるいはその欠如）といったものを受講生が実感できるような授業にするのが理想なのですが、なかなか一朝一夕には行かないようです。

より専門的な意味での研究領域としては1950年代のアメリカの東アジア政策について調査をしています。最近感じることは1950年代という時代の捉え方が、この時既に成人であった世代の研究者と私のように子供に過ぎなかった若手とでは幾分異なるということです。何れにせよ私なりの時代観のようなものをいつかは構築したいと考えています。またそうすることによって現在のアメリカを分析、理解する独自の方法が発見できるようにも思います。

最後に私の趣味について触れると、現在は美術館やアメリカ史の旧跡を巡ることに興味があります。これはアメリカ各地の大統領図書館やワシントンの公文書館に調査旅行をした際に、周辺にあった美術館などを訪れるうちに次第に絵画や歴史的遺物の魅力に心引かれていったものです。どうぞ今後とも宜しくお願い致します。

（社会科学コース・政治学）

## 二年目の社会科学研究科

### 編集部

社会科学研究科は、法・経済・総合科の三学部を基礎とし、「伝統的社会科学の成果をふまえた上で新しい社会現象に対応し、現代社会の要請にも応える斬新かつ学際的な学問領域を開拓する」ことを目指して設立された研究科である。

社会科学研究科が設立される以前、広島大学大学院の研究科群のなかには地域研究研究科が存在していた。この研究科は総合科学部の文系コースを基礎として設立されたものであるが、修士課程までではなく大学院としては不完全なものであった。一方「飛翔」30号の「新発足の社会科学研究科」によると、1979年に広島大学と文部省との間で新しい形式の大学院構想「10・23文書」がまとめられたとある。この構想の段階で既に博士課程まで含んだ人文・社会科学の大学院の設立が予定されていたようであるから、この地域研究研究科はかなり暫定的な組織であったと考えられる。地域研究研究科がつけられる一方で、この新しい形式の大学院の具体化が要求されたわけであるが、この具体化の段階では数多くの問題があったようである。例えば総合科学部を基礎とする国際社会論専攻に、法・経済学部の教官をどのように参加させるか、また従来の地域研究研究科の研究領域担当教官を新しい研究科の中にどう位置づけるか、などの問題だ。それらを1つ1つ解決した末に、1986年の研究科設立に至ったのである。

社会科学研究科は法律学・経済学・国際社会論の三専攻から成っている。法律学・経済学専攻はかつての法学研究科、経済学研究科（いずれも修士課程）から派生したもので、法学部・経済学部、並びに総合科学部の法・経済学系の教官が参加している。

国際社会論専攻はかつての地域研究研究科を基礎として、平和科学研究センター・大学教育研究センターの協力のもとに出来上がった専攻であり、総科の地域文化コースの教官並びに社会文化コースの法律・経済学系以外の研究に携わる教官、そして前述の2センターの教官が参加している。従ってこの専攻で取り扱うテーマは非常に幅広く、雑多とさえ思える。それはこの専攻の成立過程がそう成さしめたともいえるが、この雑多さがある意味では「総合科

学」的なものかもしれない。

次に研究科における履修条件を見てみよう。博士課程前期（修士課程）は2年で必要とされる専門科目の単位数は30単位、博士課程後期は3年で8単位ということは他大学の同様な研究科と余りかわらないであろうが、修士課程における履修方法は下記のとおりである。

I 履修基準 (1)専門科目（講義・演習）30単位以上  
(2)研究指導 (3)修士論文

II 履修方法 (1)指導教官指定科目 6単位  
(2)自由選択科目 16単位以上（ただし他専攻・他研究科専門科目より最低4単位を履修）(3)演習 8単位以上

計 30単位以上

自由選択の中で、他専攻、他研究科の専門科目から4単位以上の履修を必要とする、というのは社会科学研究科独特の制度であろう。

更に社会科学研究科の授業科目の中には「共同演習」「総合演習」というものが存在する。「共同演習（Ⅰ～Ⅲ）」とは専攻内で異なる専門分野の教官が複数集って演習を行うことであり、「総合演習」とは、三専攻にわたる教官が集って演習を行うことである。ここにあげられたような制度は、総合的な見方を養う目的で定められたものであるが、1つのテーマについて集中的に研究したい学生には「他専攻/研究科の単位を4単位以上」というのは重荷になるかもしれないし、総合・共同演習も教官間で連携がうまくとれないと互いに関連のない個別的なテーマの羅列に墮してしまう危険性もあろう。

結論として社会科学研究科は単なる社会科学の一分野を学習研究するだけの研究科ではなく、「総合科学」的な様相を強く有し、制度もまたそれを保障促進する様になっているといえることができる。

私達は社会科学研究科において、その理念は現実の中にいかに生かされているか、また同研究科において今何が問題になっているか、ということを院生の立場から探るべくアンケートを実施した。そしてその解答を検討しながら、社会科学研究科（私達がそこの主体でないにせよ、将来学ぶ可能性のある場として）の姿を考えてゆきたい。

〈アンケートより〉

①「大学院に進学された理由・動機をお書き下さい。」

自分の研究分野をより深く勉強したかった／自分の問題意識を解決するため／研究者になりたかったから／就職に不向だったから、など。

まず、この問いに対しては、「もっと勉強したかったから」という類の解答が、いくらかのニュアンスの違いを含むにせよ、圧倒的多数をしめていたが中には「職業に不向だった」という様な解答もあった。

大学の4年間は多くの人にとって、それ以降の人生を決めてしまう期間であろうが、その後真直ぐレールを進んでいくだけではなく大回りしたり、レールを乗り越えることも当然あってしかるべきことであろう。「もっと勉強したかったから」という解答の裏にも、そういった進路の変更があるかもしれない。やはり4年間という時間の中で自分を全て見極めることは殆んど不可能であろう。大学院とは自分を見つめ直したい人、また企業や役所という組織に適応できなかった人の（悪く言えば）シュルターとしての役割も果している様に思われる。

②「あなたは広大総合科学部の出身ですか。」

Yes-43% No-57%

このアンケートは殆んどが国際社会論専攻の方々を対象で、またサンプル数が少ないという欠陥があるが、それを念頭において見ても、思ったより総科出身の割合が多いように思われる。国際社会論専攻に属する教官の多くは、地域文化コースの教官を兼ねており、同コースからの進学者が相当数あるのであろう。また NO と答えた人の出身大学は極めて多様である。学部を見ると文学部が多いが、その中でも学科、専攻はバラエティに富んでいる。

③「大学院に進学するにあたり、広島大学大学院社会科学研究所を選ばれた理由・動機をお書き下さい。」

従来の文学研究が内包する狭領域を越える広領域の研究を深めるのに最適の場であると考えたから／自由に勉強したいから／自分の専攻分野を社会科学全体の中で位置づけたかったから／他大学、研究科にはない独創性がある所／進学が容易であったから／自分がつきたい専門領域が同じ教官がいたから／自分の専門指導教官がいたから、など。

これらの解答は、a)自分の研究領域と同じ教官がいる、b)広い範囲のことを学ぶことができる、c)自分にとって進学が容易であった、の三つにまとめられるように思われる。a)については、詳しく言え

ば「自分の研究分野をより深く学ぶ為に、その分野の研究を行っている教官につく」ということで、そこは他の大学院と大差ないように思われるが、b)にあたる解答は社会科学研究所独特のものであると思われる。即ち広い分野の教官が所属し、総合演習、共同演習という制度を持つ社会科学研究所の総合的な側面に魅かれた人々がかなりいる、ということである。

しかし、この「総合的側面」は、後述するように大学院の持つもう一方の目的である「専門領域の深化」と矛盾する側面を持ち合わせている。

④「社会科学研究所についてお尋ねします。」

1)社会科学研究所の制度について優れていると思われる点と問題があると思われる点をお書き下さい。

優れている点 狭い分野に固執することなく、広い知的刺激を受けられる／可能性としての「学際性」と「将来性」／色々な分野に興味が持てる／他専攻分野との交流が客観的には可能／総科・経・法の授業がとれること／よくわからない、など。

これらの解答にも同研究科の特徴であるところの「学際性・総合性」を重視した制度を院生が高く評価していることが伺える。「特になし」「よくわからない」という解答を除けば、全ての解答が何らかの形でこの「学際性・総合性」と関連を持っている。

しかし「可能性としての『学際性』」とか「他の分野との交流が客観的には可能」という解答にも見られるように、単に制度を整えるだけでなく、その制度を動かしてゆく人間（教官、学生）の積極的意志がない限り「学際性・総合性」は実現し得ないと言えるだろう。そのところに現れる問題点を後述の解答に見ることができよう。

問題のある点 教官同士の横のつながりが乏しく、「総合的」な研究をしてゆくためには院生の方が、自分の研究領域の中に教官の研究領域をどのように取り込んでいくか、ということを考えなければならない。／共同演習などを除いた専門の勉強は自分だけでせねばならず、他との交流が持てない／履修単位が多すぎる。なじみのない分野を必死に準備するのはつらい。自分の専攻を深めることができない／文学部のように集中講義がない／事務手続をする場所と実際に研究指導を受ける場所が離れている／他研究科の講義が19条を使ってしかとれない／学際的研究・教育というものが制度として確立されてしまっている為に、院生の自主的な共同研究への志向性が限定されている、など。

ここには建前では「学際的・総合性」をうたっておきながら、実際のところ教官の側でそれを推しすすめようとする意欲が余り無く、この制度が有効に利用されていないのではないか、という院生の意識が現れている。また教官の側で上手く推しすすめない「学際化」を院生の方が実現している、という実態も現れている。その一方で「学際化」を実現すべく設定された社会科学研究科の制度が、逆に院生にとって重荷になっている、という面も見ることができる。最後の解答のように、制度そのものをラディカルに疑う見解も、また納得させられるところがある。

2) 社会科学研究科の内部の施設(例: 院生研究室)や、全学的な施設(例: 図書館・情報処理センター)について、学習研究活動をするにあたって便利であると思われる施設と、不便であると思われる施設を、具体的にお書き下さい(理由も含めて)

便利な施設 院生研究室の設備/図書館/情報処理センター/なし、など。

不便な施設 図書館、または図書に関する施設(多数)/院生研究室の設備、など。

「便利な施設」の解答の中に一般的傾向を見出すのは難しいが、強いて言えば院生研究室に関わる設備を「便利」と考える解答がいくつかあった。だが一番多いのは「便利な施設はない」という解答であった。一方不便な施設として、際立って多かったのが図書に関する施設である。

図書は院生・学部生を問わず最重要な研究資料である為これを探しづらい、借りにくいというのは研究にとって極めて大きな支障である。図書館は別としても研究科に直接関係のある図書は少しでも使いやすくすべきであろう。

3) その他社会科学研究科で学習・研究をされてゆく中で同研究科に対して満足しておられる点、不満を感じておられる点をお書き下さい。

満足している点 多角的に研究出来る/異分野の院生同士で情報交換ができる/自由に研究をやらせてもらえる/なし、など。

不満を感じている点 教官・院生の横の交流がない/自分の関係する授業が少ない/多様なカリキュラムがない、など。

ここで「その他」という定義が問題となる。質問者としては、「学習・研究活動に関わりのあることで、前出の2つの質問にそれほど重複しないこと」という意図であった。解答もそれと合致するものが

多かったので安心した。「満足している点」では「学際性」に関わる解答が少数あるにせよ、最大数は「なし」であった。「不満な点」はそれぞれ違ったタイプで一つにくくり得ないので、各々を見ていただきたい。

⑤「学資(生活費も含む)は主にどこから得ておられますか。」

仕送り	57%
自助	50%
奨学金	43%
その他	7% ※重複あり

ここでは仕送りというのが予想以上に多かった(もちろん重複はある)。純粋に仕送りのみ、という解答はなかったが、収入源の1つとしている人が相当数いるようだ。一方、奨学金という解答は意外と少なかった。将来返還義務のある奨学金は最近ではあまり好まれないのであろうか。いずれにせよ進学希望の人は学資についてはよくよく考えておくべきだろう(特にオーバー・ドクター状態になったら学資を得るのは極めて難しいであろう)。

⑥「修了後の進路はどのようになさいますか」

研究者	50%
公務員	14%
教員	7%
その他	15%
未定	14%

やはり研究者が多かったが、それ以外の職種では公務員(教員も含めて)が目立った。アンケートの解答に公務員試験を受けて結果まちというものがあつた。しかし、このアンケートでは会社員という解答は皆無であった。文系の大学院修了者の苦勞がありと浮び上ってくる様である。

以上でこの記事を終えるが、こうしてアンケートを見ると、対象が国際社会論に限られるとはいえ、「学際性・総合性」という理想が現実の場の中で様々な矛盾を見せていることがわかつた。殊に「総合性」と「専門性」という理念の矛盾は大きい。しかし社会科学研究科はまだ出来て二年目であり、まだこれから大いに変化し得る可能性がある。この稿が将来、大学院に進学しようと考えている人に参考になれば幸いである。

最後にアンケートに協力して下さいました院生の方々に厚くお礼申し上げます。

(文責 戸敷 聡・海住 隆雄・宮尾 佳道)

## Fashion But Passion

地域文化コース 2年 小林かくみ

僕が广大で公にものを言うのはこれが初めてである。伊藤のタッコさんのお薦めにより今回「飛翔」に登場することとなった。最初は「日本人がオリンピックで日の丸を振るとなぜ違和感があるか」について書こうと思ったが、性質上話が重くなり、その重さゆえに今場所の小錦のようにぶざまな結果に終わることを危惧して、もう少し軽めの「广大生のファッションはなっていない」というテーマで書こうと思う。僕は最近少しばかり、音楽評論家の渋谷陽一の文体に影響を受けており、こういういかにも物議をかもし出しそうなことを冒頭に持ってくるのを好みとしている。

さてまず問題になるのは、一体ファッションがなっていないとはどういうことかということになるが、僕がここで言いたいことは、广大生の着ているものがダサイとか、ファッションセンスがないだとか、そういう類のことは少々異なる。現に僕など服を買って、よせばいいのにうれしがつて友達に見せるとまず十中八九笑われてしまい、センスに関してはいくぶん分が悪そうだからである。

僕がファッションに期待するのは、その人の「人となり」の表現である。「人を外見で判断してはいけない」という命題は、正しくは「外見だけで」と訂正されるべきであり、外見は、どうして立派に人間判断基準の一角をなすものである。だから、いかにも「な、何言ってんだい。僕たちは学生じゃないか。ファッションなんて二の次三の次だよ」というふうの人を見ると、大きなお世話でありガタガタ言う正当性は一切ないことを承知したうえで、その人の自己表現意欲の貧しさを僕は感じてしまうのである。僕が男として自分のまわりの女性を見るときも、感じることは同じであり、青春ど真ん中の女の子でありながらこのセクシーさの欠如は一体何たることかと、いつも心の中で嘆いてしまう。人それぞれライフスタイルは様々であるが、その中で可能な限り、男は macho で、女はセクシーであるべきである。これは直観的で全然説得力はないが、それ無くして一体何であるというのだという気さえ僕はするのである。

「ははあん。こいつはコレコレに一番金をかける主義だな。このコの恋愛観はどんなかな。あいつは仮にこう話を振ったとしたら、こう答えるんじゃない

いかな…。」残念ながら、構内を歩く時にこのような想像の一人遊びを楽しませてくれるファッションには滅多にお目にかかれない。それは今まで書いてきたように、着ている服がブランド物か、高いか安いかなどという問題ではなく、そのファッションが日々の dull な生活を反映してどこまでも dull であったり、はたまた全然その人独自の生活に立脚しない、どこにでも転がっている着せ替え人形のようにであったりするということなのである。さらに言うならば、ファッションが自己表現という要素を著しく欠いており、俺が女ならこいつを彼にしたいと感じる男や、アホなことと知りつつ思わず足が勝手に動いて後を追ってしまうような女性を見ることが皆無に近いということなのである。

まあつらつらと書いてきた最後にもう一度言うが、今まで僕の言ってきたことは、論理的説得力のないただのタワごとである。決して日本人得意の謙遜ではなく、どこからどうみてもそうである。そういうことを考えていればこの退屈な广大構内を歩くときの暇つぶしぐらいにはなるかもしれない、それだけのことであるから、あまりムキにならないよう願う。



## 自然農園を訪問して

環境科学コース 3年 井上 尚子

これは、この夏休みに妹と2人で屋久島を旅行した時の体験を綴ったものである。屋久島に渡る前に鹿児島で一泊した。その時のホテルはまるで博物館のようで、世界各地の遺跡からの出土品が満ち溢れ、たいへん印象的だった。屋久島に着いてからは、南国ムードの漂うフルーツガーデンを訪ね、八重岳への登山にも挑戦した。次には伊予の福岡正信さん宅の自然農園を見学した。そこで見聞きした「自然農法」には学ぶべき事が多々あったように思う。

自然農園のある山に最初に足を踏み入れたとたん蝶の群れ飛ぶ様やトンボの種類が多いのに驚かされた。季節もちょうど夏であり、そこはまさに命溢れる山だった。山小屋では福岡さんの所に自然農法を学びに来ているタイの女性が出迎えてくれ、農園でとれたスイカー玉と籠いっぱいトマトで持て成してくれた。この時スイカの種は小皿に集め、食べ滓を肥料として辺りにまくのが自然農法の第1歩だ。

一息ついてから園内を案内してもらった。雑草だ

と思っていた植物が齧ってみると実はハッカだったり、去年の大根が繊維だけになって土にポッカリ穴を開けていたり、様々な植物が混生していた。案内してくれたタイの人はモリシマアカシアの木の下に来ると落ちていた種を手持ちのビニール袋に詰め始めた。後にわかったことだが、この種子は海外に送るためのものだった。

夕方頃福岡さんが山にあがってこられた。写真では見知っていたが、御本人を目の前にしてその存在感に圧倒された。山小屋でいろいろお話を伺っている時、自然とは何か、神とは何か、と福岡さんが私たちの考えを訊ねられた。私は自分の中にそのような概念がはっきりしていなかったため焦りを感じ、何か答えようとして口から出すことばは空虚だった。私は夕明りの空と柔らかい緑をバックにした福岡さんのシルエットを見つめた。福岡さんは体をヒョイと伸ばし、後ろに生えている植物を示された。「これがキュウリの原種だよ、君。これだって正しい調理さえすれば食べられるんだ。そしてこれなら放っておいても自然に生えてくる。おまけに土地を砂漠化することもない。もともと人間は生きるために何もすることはないのだ。土がある。植物が生える。それを食べる小さな動物が現れる。それをまた食べる大きな動物が現れる。そして人間も現れたんだ。食べ物があるから生物は生まれた。人はその食べ物が与えられる仕組みをよく理解もせずには壊してしまう。自分で自分を殺してしまっている。」また福岡さんは私たちに目標を持っているかと聞かれた。私は「良く生きる事です。」と口から出まかせを言った。「良く生きるとはどういう事だね。」と尋ねられて始めて自分がこれといった明確な目標も持たずに漠然と生きていることに気づいた。「目標というものはしっかり持つておかなければならないよ。でなければとんでもない所に迷いこんでしまう……。」私にとっては理解できたようでとっさにはわからない言葉だった。福岡さんはまた、アフリカやインドで自然農法を実践している人々が送ってきた写真を見せて下さった。写真に写っている人々にはこやかに緑の大地を指し示していた。特に印象に残ったのはあるサバンナ地方の航空写真だ。それは人間の過った自然に対する扱いが砂漠化を招く様をありありと示していた。自然状態で残された部分は青々としているが、農耕や放牧の行われた所は明らかに砂漠化が進行している。

“しょ”  
翔

日がとっぴり暮れてからは1本の蠟燭の灯を囲んで話した。タイの人が“ロコ”の話をしてくれた。タイには四季折々に様々なロコという植物が生え、昔からタイ人はそれを食用にしていたそうだ。季節の変わり目には病気をし易いが、そのロコを食べると体が丈夫になる。ところが最近西洋文化のハンバーガーや中国の白菜料理等がタイの生活に入り込み、おいしい上に料理が楽だからと多くの人が好むようになった。そのためタイ原産の、砂漠化を招く可能性のないロコは捨て去られ、人々の体は病気にかかり易くなった、と彼女は言った。時々消えそうになる灯の下で、福岡さん宛ての手紙も見せてもらった。彼の今度のマルサイサイ賞受賞を讃えるものや、自然農法を学びたい、といった趣旨のものが外国から数多く寄せられていた。彼は初め土も死に荒廃していたこの山に40年かけて緑を蘇らせた人だ。40年という年月は人間の一生では莫迦にならない長さだ。だから目標がしっかりしていれば時間がたつにつれ目標に近づくが、そうでなければ、目標からさらに掛け離れていく。緑の大地を求めるつもりがいつの間にか砂漠のど真中に迷い込み、カラカラの砂嵐が吹きつけるばかり……。先ほど見せてもらった写真のイメージと重なってそんな情景が浮かんだ。世界をあちこち歩いてこられた福岡さんは世界の急速な砂漠化を嘆いておられた。「もうあまり悠長なことを言っておれんのだよ。誰かが飛行機から種をばら蒔いてくれでもしなけりゃ。」そうおっしゃる福岡さんはあらゆる種を砂漠化の深刻な国に送っておられる。

## 上を向いて歩こう

### M.2 男子

上を向いて歩こう 涙がこぼれないように  
思い出す春の日 ひとりぼっちの夜

『学校』というところに足を踏み入れて以来、小中、高と実に様々な先生に出会い、教わり、話を聞かされてきた。しかし私の場合は、特に感銘を受けた言葉というものはなく、話自体もそれほど記憶に残っていない。が、何故か小学時代の微かな記憶としてこの『上を向いて歩こう』という古い歌謡曲を引用したある先生の話（説教）が頭に残っている。それは「……まーそういうわけで勉強するように。現状に満足するでなく、常に上を見て、ほら歌にもあるだろう『上を向いて歩こう』というのが…」である。（多少の脚色あり。また当時どれだけ生徒がこの曲を知っていたのかは定かでなく、私自身も知らなかった。）確かに成績を上げ、少しでも良い学校（ここでいう“良い”は単に“偏差値が高い”の意味）に進みさらに一流会社に入るということは、今別に珍しいことではない。それが良いか悪いかはここでは別問題として、例えば、より良い社会、より良い自分というように“より良い”ものになる可能性のある限りは、上を向いて歩くという前向きな姿勢、いわゆる向上心を持つということが、人間やはり必要なのではないか。もちろん時には足元や回りを見つめることも大切だが。

上を向いて歩こう にじんだ星を数えて  
思い出す夏の日 ひとりぼっちの夜

この曲は御存じのように『スキヤキ』ソングとして世界各国に知れわたり、ソウル五輪の開会式行進曲にも選ばれている。また日本人の歌として初めて全米No.1を記録した。しかし、そのキュウ・サカモトはあの夏の日、散った。

悴せは雲の上に 悴せは空の上に  
上を向いて歩こう 涙がこぼれないように  
泣きながら歩く ひとりぼっちの夜

見てのとおり、内容は寂しく悲しいものである。が、それとは裏腹に、メロディはむしろ明るさを感じさせる。

『上を向いて歩こう』これが何年の作品なのかは知らない。しかし、日本の高度経済成長というものを、色々な意味で彷彿させるタイトルである。

“ぼこ”

箱



## ダ・スヴィダーニヤ！ 淵上克司先生

ロシア語講座 米重文樹

総合科学部ロシア語講座淵上克司先生は、去る7月16日未明、不慮の交通事故（暴走族による無免許ひき逃げ）で、40才の生涯を終えられました。先生は、東京大学大学院ロシア語ロシア文学博士課程を御修了の後、昭和54年8月総合科学部ロシア語講座専任講師として着任され、昭和59年4月助教授に昇任、総合科学部における9年間を、ロシア語と英語の担当教官として、その深い情熱と温かさに充ちた授業を通して、多くの学生に強い感銘を与えられました。また、御専門のロシア文学においては、ドストエフスキーおよび亡命作家レーミゾフを中心に、「ロシア的時間世界」を鋭い洞察力をもって追求され、多くのすぐれた論考を残されました。しかし、あまりにも痛ましい、かつ、志半ばにしての旅立ちは、どんなにか御無念であったことでしょうか。後期の授業の始まったキャンパスで、先生のあの優しい笑顔に接することは、私たちにとって、もはや不可能となりました。何と悲しいことでしょうか。総合科学部における9年間にわたっての先生の御努力に対して、私たちは、心からの「ありがとう」を言わなければなりません。そして、「さようなら」ではなく、「ダ・スヴィダーニヤ（また逢うまで）」の言葉を心の中で言うことにしたいと思います。合掌。

## 編 集 後 記

初めて『飛翔』の編集に携わり、気分的にもこんなに大変だとは思ってもみませんでした。担当の編集委員の教職員の方々、学生編集委員の皆さん本当に御苦労様でした。

今回の特集“プログラミング通論”には多くの批判等が盛り込まれていますが、これを機会に皆様で今後の行き方を考えていただければと思っています。

(広報委員 栗田 正秀)

「飛翔」を読めば総合科学部が分かる、と言われたいのは編集スタッフ全員の気持であろう。とにかく今回も学生諸君頑張りました。

(広報委員 岩田 賢司)

正直告白すると、私は昨年度まで飛翔をほとんど読むことはなかった。要するに「読まず知らず」だったのである。今年度初めて飛翔の編集に携わり、原稿を読むと、書いた人の個性が伝わり、いつの間にか引き込まれてしまった。これからも総科にふさわしい個性豊かな飛翔を。

(広報委員 佐野 真樹)

今回初めて、飛翔の編集にたずさわって感じたことは、学生が主体的に編集できる広報誌があることの良さである。ただ、この誌をもっと自分達のもの、素直な意見の交換の場にしてほしい。どの学生も待ちどおしいと思うような誌にしてほしい。

(広報委員 中根 周歩)

飛翔の表紙が変わりました。これまでの写真によるシリーズから、イラストによるデザインへと一新されました。描き手はまだ1年生なので、当分のシリーズが続くと思われます。次回もお楽しみに!!

(厚生補導係 宮城 勝彦)

原稿集めだけでも、ずいぶん大変なものだと思いました。

(川本 瑞恵)

今後の教訓

“やるべき事は早くやろう” 肝に命じておきます。

(内山 清美)

「ひろく、あさく」がモットーです。

(中家 伸之)

私の様な無責任な人間は飛翔委員になってはいけなかったのだが、今となっては後の祭り。皆さんご迷惑をおかけしますがどうぞよろしく。しんさん、君ももう逃げられない。

(野村 幸代)

衣笠さんの記事は今となっては、ものすごく過去の事のように思えます。山本さんは監督になったし…関係ないか。自分のことは棚に上げて、誰かさんを怒ってばかりいるうちに、時間が過ぎてしまいました。

(小松 千尋)

疲れました。

(山崎 明子)

夢は夢だから夢なのであって、だから例え夢がかなわなくても、ちょっと悔しがるだけで終わりにした方がいい。

(矢野 泉)

日本酒が恋しい季節となりました。私は日々、歌い過ごしています。暇な時は、心がマヤへ翔んでいきます。この頃「自分は今、何をすべきか」と迷い、煙草がなくなります。本が留まります。時間が欲しいです。そして、——騰々任運。

(福永 弘樹)

最近どうも時間不足に悩まされる。睡眠不足も準備不足も、全て24時間以内に収めようとするから問題があるんじゃない？解決策を見つけようとは思わないけど、いつも要領の悪い私。

(下野 寿子)

ことは色々な山に行ったが自分の足で登ったのは大山と黒川明神山だけである。しかも両方とも遊びではなかった。遊びで山へ行きたい。

(戸敷 聡)

私は歌謡曲にはあまり興味関心がない方だが、どういうわけか最近「NAI-NAI 16」という曲が耳の奥に残って離れない。これは一体どういうわけなのだろう。そして私の手には、日本テレビからもらったボールペンがある。

(伊藤 多喜子)

ここんとこ時間にゆとりができたのだろうか。夜中に、机のスタンドの明りだけつけて、ぼんやりできるのが妙にうれしい。

(海住 隆雄)

究極の玩具、それはマック2。ゲーム機なんぞじゃない。98だって恐くない。これで値段が1/5ならねえ……。

(宮尾 佳道)

今回、飛翔の仕事は10月にした。睡眠時間を削りもした。しかし、いつもと同じ9月だった。

(布川 克彦)

胃潰瘍になりそうな気分だった。が、私の胃は丈夫だった。私は基本的に早寝早起きが好きだ。なんてHealthy!

(内藤 千恵美)